

## 掌の小説Ⅱ

浜辺で 休校式 五月初めの朝の森 普陀山へ

正月の過ごし方 雨とラジオ テンバツばあちゃん

座敷わらし?と少女 漁港にて

神野麻郎

### 浜辺で

「東浜に行こうか？」

遅めの昼ご飯を食べた後しばらくして、ママが言った。居間でめいめいになんともなく遊んでいた由那も和司も喜んだ。

「うん、行こう行こう。車で行こう」

「わあ、東浜、東浜。泳ぐ？」

「さあ、まだ海は冷たいかなあ。六月だもんねえ」

「泳ぐって、カズはまだ泳げないじゃない。でもママ、だいじょうぶなの？ 疲れてない？」

由那は気づかう。

先月から新しく始めたパートの勤めや家事でママは忙しく、それにこのごろはパパとよく口げんかして落ち込んでいることが多いのだ。

パパは、三月の終りに家族で島から引越してきてすぐ、慣れない配達の仕事を始め、毎日朝は早く出てたいいてい暗くなってから疲れて帰って来る。休みの日は少なく、しかも不定期だ。今日も日曜日だが、パパは朝からいない。

「だいじょうぶよ。ママ、久しぶりに海が見たくなったわ」

免許をとったばかりのママの軽自動車の運転はひやひやものだったが、東浜までの道は空いていた。駐車場に車を止め、松林の中を抜けると浜はすぐだった。防波堤から眺めると砂浜は弓なりになって長々と続いている。夏は海水浴場になるが、まだ店は閉まっている。

砂浜に降りると風があり、少し高い波が音立てて寄せていた。由那にはなつかしい潮のにおいがした。空は雲間から日が差したりかげったりしている。

長い砂浜に人影は少ない。サーフィンをしている数人のほかは、遠くで釣りをしている人や犬を散歩させている人がちらほら見えるくらいだ。

由那と和司はすぐに波打ち際まで駆けていった。遅れたママに、  
「ママ、靴脱いで海に入っている？」と由那は振り返って叫んだ。

ママはうなずいた。

「カズ、いいって。靴下と靴脱いでから入り」

手を入れるとたしかに水はまだ冷やりとしたが、気持ちよかった。踏むたびに足が濡れた砂に少しめりこむ感触もおもしろい。島にはこんな大きな砂浜はなかった。

和司はまだ少し波が怖いのだが、だんだん慣れてズボンまで濡らし、ふざけて踊るような恰好をしている。由那もくだけてきた波をかぶり、肩まで濡らしてしまった。

「遠くへ行ったらダメ。溺れるよ」

言いながらママは砂の乾いた所にビニールシートを広げ、坐った。それからぼうつと遠くを眺めている。沖の正面には、家族が三月まで暮らしていた笹島が浮かんでいる。ママは笹島が見たくてここに来たのだと由那はわかった。ママは笹島をなつかしがっているのだろうか、こっちに引越してきたことを後悔しているのだろうか。

由那も波に足を洗わせながら、青い海のかなたにかすみがかっている笹島を眺めた。ここから見ると島は人が寝ているようなやさしい姿をしている。集落の家並の端の方がわずかに見える。その集落の中に、今もおばあちゃんや見知った人たちがなんでもなくいつものように暮らしているのはふしぎな感じがした。もうそれが遠い別世界のように思えてしまうのもふしぎだった。

和司がママからゴムボールをもらって砂の上で蹴り始めた。和司はサッカーが好きだ。「ネエネエ！」と呼ばれて由那も相手になった。ボールは濡れた砂の上をころがり、時々波につかまってさらわれそうになった。

なにを思ったか、和司がその波に向かってボールを蹴った。うまくヒットしてライナーになり、ちょうど寄せてくれた波の向こう側に落ちた。白い泡が広がる中に浮いている。和司はそれを取りに行こうと波に踏み込んだ。でもゆっくりにしか動けない。ボールは引き波に引かれ風に流されて遠ざかった。なお追っていた和司は転んでしまい、次に寄せてきてくれた大きな波に呑み込まれた。一瞬のできごとだった。

由那は「カズ、カズ！」と叫びながら波打際から和司の方に走った。後ろから、「カズ、ユナ！」というママの声も追ってくる。波がしらの向こうに水の中でもがいているカズの小さな身体が見えた。

その時だった。長いジーンズの足がさつと由那を追い抜いてまっすぐ海に踊りこんでいった。長髪がなびいた。その人はすぐカズのそばまで行って抱き上げた。腰のあたりまで浸かっていた。波をまたぐようにしてすぐ戻ってきた。ママがカズを抱き取り、抱きしめ、涙をぼろぼろこぼしながらその人に何度も礼を言った。

「いえ、だいじょうぶだったのかもしれない。あだし、よけいなことをしたのかもしれないせん」とそのお姉さんは言ってお笑った。

和司はママの胸で少しむせながら赤ん坊のように泣きじゃくっていたが、塩水を少し飲

んだくらいのもうだった。

「何年生？」とお姉さんは訊いた。

「四年生。カズは一年生です」

「そう。お名前は？」

「柚木由那」

「ユズキユナちゃん？ いいお名前だね。そうユナちゃんって言うのか。偶然だねえ、あたしの名前もユナよ。ユナちゃんのユナはどんな字を書くのかな？」

脱衣所にいっしょに着替えに行った後、なんとなく防波堤の外側の段差の所に海に向かって二人は坐った。お姉さんは学校の先生よりもやさしくしゃべってくれるし、同じ名前だということで由那は親しみをおぼえた。それに黒っぽい服を着て薄化粧や金色のイヤリングも映えて髪が長くて、お姉さんは雑誌のモデルみたいにかっこよかった。由那はいろいろしゃべってみたくなった。ひとりで言葉がすべり出てきた。

「あのね、あそこに島が見えるでしょ。沖の方。笹島っていうの。あたしたち家族は、三月にあの島から引越してきたの」

「え？ あの島から？ そうなんだ」

お姉さんは少し驚いたようだ。島は雲間からの光を受けて、緑と茶の部分がさつきよりはくつきりしていた。

「あのね、どうして引越してきたかっていうとね、小学校の児童が、六年生が二人卒業したので、あたしと、二年生のタケル君だけになってしまったの。それで三月で島の学校は閉校になったの。島から船で毎日ほかの学校に通うのは無理でしょ。それでパパとママがもう引越ししよって」

「そう、そうなんだあ。大変だったんだねえ。ユナちゃんは小さい時からずっとあの島で暮らしてたの？」

「そう」

「じゃあ、初めてこっちに出てきたんだね。こっちの暮らしにはもう慣れた？」

「うーん、慣れたような慣れないような。でもパパもママも新しい仕事を始めて大変なんです。パパは笹島では自分の船を持って漁師をしてただけど、その船も売ってしまって、今は車で配達する仕事に替わって、忙しくて。ママもスーパーに勤めて疲れてるの」

「そうなんだ……。ユナちゃん、島の学校からこっちの学校に転校してきたんだ。新しい学校はどう？」

「うん、初めはね、たくさん同級生がいたのでびびくりした。島ではずっと一人だったから。授業の仕方も違うし。島ではね、教室で一人の先生があたしとタケル君だけに教えてくれたの。でもこっちでも友だちは何人かできたよ」

「よかったねえ、友だちができて。きつとこっちの学校にもそのうち慣れて楽しくなるよ」  
お姉さんがそう言ってくれたのに気をよくして、由那は今の学校のように友だちのことをひとしきりしゃべった。にこにこしながらお姉さんは聞いてくれた。

カズはもう元気になってまた砂浜でボールを蹴っている。でももう波の方には近寄らないようだ。ママはもとの所に坐って時々こちらを振り返りながら、やっぱり海や島を眺めている。少し沖の朱色のブイのあたりを二羽の鵜が横切っていく。

由那は自分がしゃべるばかりでなく、友奈という名前だというお姉さんにもいろいろ訊いてみたくなった。さっき、脱衣所の近くに止めてある大きなバイクをお姉さんが指さして、「あたし、これに乗ってきたのよ、ツーリングしてるの」と教えてくれた。赤と黄緑の色が目立つきれいなバイクで、隣県のナンバープレートがついていた。由那はバイクというものを初めてまじまじと見て、きれいで重そうな機械の怪物のように思えた。それをお姉さんが乗りこなすというのだ。「わあ、すごいなあ」と思わず声を洩らすと、「乗ってみる？」とお姉さんはシートにまたがらせてくれた。ペダルに足を乗せ、身体を傾けてハンドルを握った。初体験で由那は興奮した。狭い島の集落の中にはバイクも車もなかった。

「ツーリングって、楽しいの？」

「楽しいよー。自由に走っているとね、自分が風になったような気がして気分がいいの。いろんなことが忘れられる。いやなこととか。仲間といっしょに走るのも楽しいよ。みんなと乗っていると、見せてあげようか」

お姉さんはポケットからスマホを取り出して、一週間前のものだという動画を一つ見せてくれた。自由な服装の五、六人の男女が楽しそうに走ったり、笑ったりしていた。

「わあ、楽しそう。でも今日は一人なの？」

「そう。今日は一人で走ってみたくなってね」

「どうして？」

「うーん、そうね。由那ちゃんが正直に話してくれるから、あたしも正直に言うね。そのほうが公平だもんね。あたしね、好きな人がいるんだけどー、その人結婚してるの。もう奥さんがいるの。だから、せつないんだな。せつないってわかる？」

由那はうなずいた。

「その男の人かっこいい？」

「うん、まあかっこいいかなー」

「バイクのお友だち？」

「そうじゃないの」

「お姉さん、その男の人と結婚したいの？」

「うーん、由那ちゃんは痛いところ突いてくるねえ。それがよくわからないんだ。自分でもね」

お姉さんのきれいな横顔に少し影がさしたようだ。

「わー、大人の悩みだなあ。あたしまだ十歳だから、よくわからない。結婚っていうのもほんとはよくわからない」

お姉さんは笑った。

「そうだよねー。あたしも十歳のころには結婚なんてよくわからなかったなー」

「でもお姉さん、モテるでしょ。美人でかっこいいから」

「うーん、まあほどほどにね」

「どうしたらお姉さんみたいにかっこいい大人になれるの？」

お姉さんはまた笑った。

「由那ちゃんだってかっこいい大人になれるよ。だって、青いきれいな海に囲まれて育ってきたんだもん。大きな海はいろんなことを教えてくれるでしょ？ 小さなことでくよくよするな、堂々としていなさい、とか、心ゆたかに生きなさい、とか」

「そう、あたし、海は大好き。お母さんくらい大好き」

由那はお姉さんも海が好きなんだと思って嬉しかった。

「由那ちゃん、じゃああたし、そろそろ行くね。家に帰らないと。明日からまた仕事だしね。今日はここで由那ちゃんに会えてよかった。ありがとう。嬉しかったよ」

「あたしでも、お姉ちゃんに会えて。……あ、ちよつと待って。写真。ママにスマホ借りてくる」

由那はママのところを走っていった。ママは砂の上に立ち上がって、お姉さんに丁寧にお辞儀をした。由那は引き返して浜と笹島をバックにいっしょに写真をとった。お姉さんも自分のスマホで写真をとり、

「この写真、あたしのブログにアップするからね。「東浜で会ったかわいい女の子」という題にするかな。よかつたら由那ちゃんも見てね。あたしのブログ、けっこう人気あるんだよ」と、その名前を覚えてくれた。

お姉さんは赤いヘルメットをかぶり、バイクにまたがった。長い足、長い髪のお姉さんはやはり絵になった。ペダルをキックすると眠っていた機械の怪獣が目を覚ましてぶるぶると震えた。さつと発進して低い爆音を立てながらお姉さんは走り去った。途中のゆるい坂を越えていく所で一度立ち止まって振り向き、笑って手を振ってくれた。強く手を振り返して見送りながら、由那は自分の心の中になにか熱いものが残されたように感じた。この浜で、まるでお伽噺のように名前が同じお姉さんと出会い、話したことは、ずっと忘れないだろうと思った。

## 休校式

きょうはカエルの学校で、休校式です。

学校の講堂兼体育館兼集会所に、たくさんのカエルたちが集まっています。前方の両側の席にえんぴ服を着て行儀よく並んで坐っているのは来賓や学校の先生方です。来賓は郡長代理や村長さんらで、オタマジヤクシ保育園の園長さんも来ています。来賓席と先生席にはさまれるように、在校生席には小さな子供のカエルたちが、でもたった二匹だけさびしくぼつんと坐っているばかりです。でもその後ろの、椅子をたくさん並べた一般席にはなんと百匹以上のカエルたちがにぎやかに坐っています。みな、学校の卒業生たちです。老若男女さまざまで、村外からもたくさんかけつけてきたのです。

講堂は式が始まる前はグログロガヤガヤとしていましたが、司会の先生がマイクで、「えー、みなさまごせいしゅくに。ただ今から笹田カエル小学校の休校式を始めます」とアナウンスをするとすぐ静かになりました。

初めに校長先生が、正面の演壇に立って挨拶をかねた式辞を述べました。

「えー、みなさま、校長の〇〇です。本日は笹田カエル小学校の休校式にかくもたくさんご参集くださり、小生、まことにキンカイの念にたえません。えー、それでは初めに、もうみなさまも十分ご承知のこととは存じますが、長い長い伝統を誇るわれらが笹田カエル小学校が残念にも休校になるに至ったケイイを、不肖小生からかいつまんでご説明申し上げます」と始まってから、話は長々と続きました。集まったカエルたちはもう校長先生のいうケイイはだいたい知っているのでだいぶ退屈しましたが、でも読者のみなさんには何のことかわからないでしょうから、ここで事情をかいつまんでご説明しておきましょう。

近年笹田村では人間の過疎化がどんどん進み、若い家族が減って老人たちばかりが残り、もう田んぼがあまり作れなくなってきました。この村のカエルにとっては人間の作る田んぼこそが快適な住みかであり、先祖代々田んぼの四季に合わせて生活してきましたが、休耕田がふえて、雑草が生え放題の野原になってしまいました。カエルたちには住みにくくなってしまうのです。そこで多くのカエルの家族がもつと田んぼや池の多い他の町や村に引越していきました。それでのおのずと笹田カエル小学校の児童数もだんだんと減って、最盛期には全校で百匹以上もいたのに、いつしか五十匹になり二十四匹になりました。そのころには一学年一教室ではなく、複数の学年が一つの教室で一人の先生から教わる複式授業がふつうになりました。さらに十四内外の年が数年続き、とうとう今年度は四匹だけになってしまいました。そしてつい最近、そのうちの二匹がめでたく卒業したので、在校生といえればわずかに二匹だけになってしまったのです。

こうした事態に、五年ほど前、少し離れた町にあるカエルの郡役所は、笹田カエル小学校の廃校を計画しました。学校の毎年の運営には先生方の給料とか、行事や消耗品の費用とか、壊れたところの修理代とか、かかりも大きいのです。ただし廃校計画といっても、今後五年間ようすを見守り、もし十匹以上の児童数が安定して確保できるようならその時はさらなる存続も考えようという条件付きでした。でもとうとうその数は維持できず、地元では存続を望む声はまだ根強かったのですが、当初の計画通り「休校」が決定したのです。すぐに「廃校」にできなかったのは、もしかして今後またなにか変化が起こって地区の児童数がふえてくるようなことがあるかもしれない、だから校舎や校地は今のままでしばらく残しておいてほしいという地元からの要望に郡役所の方も配慮したからです。しかし田んぼが荒れ果てていく一方の現況では、近い将来児童数が回復する見込みはまずないので、「休校」といつてもじつさいは廃校と同じことでした。残った在校生二匹はどうなるのかというと、二匹の親たちがもうこの際とは、カエルの学校のある隣り町への引っ越しを決めたのでした。

こんなことを説明した後も、校長先生の話はまだ長々と続きました。

「えー、ふりかえりますと、笹田カエル小学校にはじつに百四十二年もの栄えある歴史があります。卒業生の総数もつこう千六百三十七匹にもなります。学校は先ガエルたちの努力により、たくさんの有為のカエル材を社会に送り出し、地域の学校としての使命を大きく果たしてきたわけがあります」

このくだりには聴衆から「ゲロゲロ」と嘆声が洩れました。この式にかけつけたほとんど大人ガエルたちが、自分たちや親たちや祖父母たちやその上のご先祖たちの母校である笹田カエル小学校にはさまざまな思い出があり、休校はじつに惜しい、残念だと思っていたからです。その気持ちは、しゃべっている校長先生本ガエルや前方に坐っている先生ガエルたちよりも強かったことでしょう。なぜなら、先生たちは地元の出身ではなく、みな三年以内に笹田カエル小学校にどこから赴任してきたカエルたちであり、新学期にはそれぞれ他校に転任していくことが決まっているからです。

校長先生は次に、「笹田カエル小学校百二十年誌」にも書かれているとおり……と学校の歴史にふれ、顕著なできごとをつづり、そして学校出身の名士たちを列挙しました。それは政治家、社長、学者、建築家、作曲家、オリンピック選手たちでした。校長先生が彼らの名前を挙げ、その業績にふれていくたび、聴衆の間からは、記憶を呼び戻したのでしょうか、やはり「ゲロゲロ」と嘆声が洩れました。

校長先生の長い長い挨拶をかねた式辞がやっと終わりました。

次は来賓の式辞で、郡長代理と村長が順番に演壇に立ちました。でも二つの話とも入学式や卒業式でよく聞くような型通りのものであったので、みなが退屈しました。続いて地元出身の郡会議員が立ち、学校や先生たちをたたえ、笹田村を持ち上げ、また自身の今までの笹田村への貢献を強調したのですが、あまりに近々行われる選挙の運動であることが見え

透いていて、聴衆席はたいぶ白けたのでした。でも続く校歌の斉唱の時にはみなが立ち上がって、女先生のピアノ伴奏で大合唱となりました。一番から三番までたっぷり歌いながら、感極まって涙を流すカエルたちも多かったのです。

続いて、最後の児童になった女の子と男の子の在校生二名が、いっしょうけんめい、仲よく半分ずつ式辞を読み上げました。これにも涙を誘われたカエルたちは多く、かわいらしく読み終わると万雷の拍手がわきました。

次は、場のふんいきを変えて、カルテットの記念の奏楽です。広い田園地帯の方で活躍している人気グループが呼ばれてきました。メンバーの一匹が卒業生だったので。軽快な曲の時にはみな心が浮き立ち、最後の荘重な鎮魂曲の時には厳粛な気分になりました。終わるとこれもさかんな喝采を浴びました。

最後のプログラムになりました。司会の先生がこんなふうで紹介しました。

「えー、では最後に、笹田カエル小学校卒業生を代表して、岡野フモトさんにお言葉をたまわりたいと思います。岡野フモトさんは、みなさまもよくご存じの通りわが笹田村が誇りとする詩ガエルです。笹田村にお生まれになって以来ずっと北岡のふもとに居住されながら、笹田の自然や日々の暮らしを深い愛情をもって詩に表され、その詩は教科書にもとられるくらいで全国的に有名になりました。それでは岡野フモトさん、よろしくお願いいたします」

杖について演壇に立った痩せた身体のお詩ガエルは、しばらく講堂の上のほうの虚空を見つめた後、こんなふうに話しました。

「笹田カエル小学校の休校式にあたり、ボクの胸は思いでいっぱいです。その思いを、ボクは詩ガエルですから、今日は詩に書いてきました。朗読します。どうか聴いてください」

そしてゆっくり、意外にもよく通る声で朗読が始まりました。

「子供の時、ぼくは学校が大きかったです。

学校はぼくの自由をしぼるからです。

きまりに従わせ、時間を守らせるからです。

嫌いな友だちがぼくをいじめるからです。

みなと同じことをさせられるからです。

先生に怒られ、殴られるからです」

みなは、お詩ガエルがいきなり「学校が大きらいだ！」と言い出したのでちよつと驚き、どうなることかと心配しました。でもちゃんと続きがあったのです。

「子供の時、ぼくは学校が大好きでした。

教室で、知らなかったことや新しいことを習えたからです。

友だちや先生といっしょに遊べ、歌が歌えたからです。

好きな女の子がいたからです。

給食が食べられたからです。

「図書室の本が借りられたからです」

みなは安心しました。そしてそれぞれが自分の学校時代をなつかしく思い浮かべました。老詩ガエルはさらに続けました。

「学校さん、今まで長い間、ありがとうございます。」

ぼくらを育ててくれてありがとうございます。

学校さん、今まで長い間、ご苦労さん。

百四十二年の間はたらいでなくて、ご苦労さん。

学校さん、これからはゆっくり休んでください。

さびしい時には、思い出いっばい、胸いっばい。

学校さん、これからもぼくたちを見守っていてください。

ぼくたちも思い出したら会いに来ます。

笹田のカエルの学校さん

ありがとう

笹田のカエルの学校さん

さようなら

朗読が終わっても、式場はしばらくしんとしたままでした。詩を聴きながら、式場に集まった卒業生の多くが気づいたのです。きょう自分がわざわざここにかけてきたのは、何のためだったのかと。そうだ、「学校さん」に「ありがとう」と「さようなら」を言うためにこそ来たのだったと。

「以上です」と言って老詩ガエルがゆっくり演壇を下りる時、今日一番の盛大な拍手がわき起こり、音楽会のアンコールの時のようになかなか鳴りやみませんでした。やつと静まって、司会の先生が、

「岡野フモトさん、ありがとうございます。それでは、名残惜しいですが、以上をもちまして……」と終わりの言葉を言いかけた時でした。客席の一匹が立ち上がって、大声で詩の最後のフレーズをくり返しました。

「笹田のカエルの学校さん

ありがとう

笹田のカエルの学校さん

さようなら

するとそれはすぐまわりに伝染して、多くの声が合わさり、くり返されました。三度目は在校生の子供たちや先生ガエルたちも加わって、全員の声になりました。その余韻が講堂内に残っている間に、客席の別の一匹が大声でまた校歌を歌いだしました。式場のカエルたち

はすぐに応じ、女先生のピアノやまだその場に残っていたカルテットの即興の伴奏も加わって、全員の大合唱になりました。そのにぎやかな歌声や楽の音は、講堂兼体育館兼集会所を揺るがし、校庭にあふれ出て学校じゅうに鳴り響き、けむりのように空にものぼっていました。

## 五月初めの朝の森

森に入る手前の路上には、もう背の高さくらいに一匹、二匹とクマンバチが陣取っている。近づくとき少し距離を保ちながらあっちこちと身を移して羽音を響かせホバリングするのは、やはり威嚇しているようだ。でも、誤解もされてもいるようだが、本来のクマンバチは平和主義者で他を襲うことはない。テリトリーをつくってホバリングしてメスが来るのを待ちながら、闖入者は威嚇だけでやりすごす。ミツバチの仲間で、好物はこのごろ盛りのフジやニセアカシアの花の蜜。オスは小顔、メスは大顔というのは愛嬌だが、メスの顔を拝する機会にはあまりめぐまれない。

路傍やちよつとした地面には先月萌え出した野草がもう十分な背丈を伸ばしてはびこっている。目立つのはタンポポに似たブタナ、たしかに麦の穂に似ているイヌムギ、葉はタンポポの葉に似て何倍も大きいギシギシ、茶色っぽい泡のような実のスイバ、紫の花のツルニチンソウ、白い花のハルジオン、黄色い小さな花のタビラコ、それにおなじみのススキ、ヨモギ、タンポポ、ハコベやヤエムグラ、スズメノテツポウにカラスエンドウ。スカンポは取るうとしてももうたけてしまっている。

ほんの一月前まで、枯れ色の裸木の列をさらしていた谷向こうの林が、今はまるで変わって朝日の中にみずみずしい新緑を誇っている。それは先月、おずおずとした目立たない芽吹きから始まったのだった。芽が伸びてやわらかな若葉を顕わし、一枚一枚が広がり、色もやわらかにたよりなかったのが濃さを加えていく。ところどころ、もくもくと雲のように新緑を湧かしているのはクスノキだ。またところどころ、フジの花の群れが木々に薄紫の衣をかけている。サクラは三月の終りからソメイヨシノが咲き始めて、ヤマザクラ、ヤエザクラとみごとに咲き続いたがもうほとんど散って、このところの雨で路面に花びらを散らしているばかりだ。早くも青や赤の小さな実をつけている木もある。

ヒヨドリは冬に目立ったが、このごろも鳴きかわしながら、波頭を描くように飛んでいる。キジバトは梢に止まって姿を見せながら鳴く。もうツバメがさかんに滑空して捕虫の仕事

に余念がない。今年このあたりに多く来ているのはやや大ぶりのコシアカツバメだ。彼らはこの地域には先月の中旬ごろに戻ってきたばかりだが（ツバメは日本で営巣するのだから、「来る」でなく「戻る」というべきだろう）、もう新しい巣を営んでいる。ウグイスが林の方で豊かな声を響かせている。「梅にウグイス」ではあるけれども、安定した声でさかんに鳴くのはむしろ今ごろだ。

森に入るとすぐにメマトイが目あたりにまつわつてきて、手で払ってもしつこく、これはうるさい。つかまえようとしても小さくてすばしこいのでいつも失敗する。森の道はやや深い谷川に沿ってやや小暗くなるが、右手の斜面を明るませているのはツツジの花だ。その上で空を覆っている木々はクスギやコナラで、谷側に多いヤシヤブシは去年の焦げ茶色の実を残したまま黄緑の葉でよそおっている。その間に二本、三本と、数日前まで川に花を散らしていたヤマザクラも混じっている。クスノキはこの時期にもはらはらと葉を散らし、道に新しい落ち葉や小枝を敷いている。クスノキの衣更えは、光沢のきれいな新緑をさかんに吹いた後にもむろに古い葉を落とすのだ。クスノキほどは目立たないが、スギやヒノキも春に部分的に衣更えをしているらしい。病変かと思まがうばかりに枝葉の一部を枯らして落としている。路傍の低木のグミやササも常緑だが、よく見れば彼らも目立たず新葉を吹き出している。

谷川に沿う道は冷んやりする。風があればなおさらだ。皮膚はまだいくらか、その冬の寒さと夏の心地よさを憶えている。川床との落差がだいぶある所に来て、ザアザア、シャーシヤーと谷川の水音が高まる。石橋がある。長さ十メートル余、コンクリート製だが木調に造られている。その橋のたもとでは、ほんの数日前まで一重四弁花のシロヤマブキが迎えてくれているのだが、花期が終わってもう花はない。シンプルで清楚な印象深い姿だった。近くの川へと落ちる斜面にはシャガの群れが、やはり白い花々を咲かせているが、それもさかりは過ぎつつある。

橋を渡る。欄干のあちこちはやわらかなコケで覆われている。欄干の下方にわずかに溜まった土のところに、まだ葉も背丈も小さいミズヒキが子供のように整列している。あたりに競合する草も少なく、今年も勢いがよさそうだ。もう十分な大きさに葉を広げたカエデが数本鮮やかな新緑を谷川にかけている。その下を清流が自然の岩の段差に沿って音立てて小気味よく走り下り、小さな滝つぼさえ作っている。

橋から道は二手に分かれ、一つは流れに沿いもう一つは迂回して、どちらもゆるい登りになる。迂回するほうを行けば、もう丈高い木々の覆う森の中で、わずかな木洩れ日が先の方へと道を綴っている。一つ目の曲がり角の近くにわりと大きな鉄の檻が一つ置かれている。イノシシ獲りの仕掛けで、中には黄色っぽい糠のようなエサが撒かれているのが見える。イノシシは本来昼行性だというが、この辺のイノシシは人を避けて夜行することが多いようで朝の森で出くわしたことはまだない。でも夜の間にミミズ獲りに掘り返されているのは

しばしば見かける。たまに仕掛けを見に来る猟友会の人と出会うことがあり、このあたりでも年に十数頭は捕獲しているのだと聞いて驚く。

森の高木にはヒノキやスギが多いが、百年にも及ぶようなものはない。木々を眺めていると、この森の歴史が多少は読みとれてくる。それは人間の歴史と交錯している。戦前や戦争の時代にはこのあたりに生えた木々は木炭や燃料用に伐られ、高木はなかったそう。その後ヒノキやスギを植林しようだが、林業の衰退のためかあるいは森の育成のためかほとんど放置されたらしい。そこに自然に他の木々、アベマキ、エノキ、カシ、クスノキ、ヤマザクラなどが混じり、植林された木々といっしょに生長した。ドングリを森のあちこちに運んで生えさせたのはその習性をもつカケスやリスやネズミたちだろう。だから七十年くらいかけて形成された都市近郊の森なのだ。

谷沿いのこの森の高木たちにはきわだった一特徴がある。彼らはみな横に広がるよりは縦に長く伸び、丈高く、あるいはひよろ高く、二、三十メートルほどもある。クスノキやエノキまでもがそうで、ヤマザクラも例外ではない。下から見上げると幹を上へ上へと伸ばし、上空で横の木々と競い合いながらかるうじて枝葉を広げている。一本一本の姿を取り出せば驚くばかりひよろ高く、しかも樹冠の面積は狭いのだ。どうしてそんなふうになったかという、一つには光の届きにくい谷底に生えたからだ。二つには自然にまかせてけっこう木々が密に混みあったからだ。要するに水は豊かな谷の近くで、密に隣り合う木々が競合しながら光を求めて天を目指していった結果なのだ。たとえばこの近所でも、森が切れて人家に近い野原に立っているアベマキの大木は、枝葉をクジャクの羽のように広げたすがすがしい樹形だが、谷に沿う森の中ではそうはいかなかった。

混みあう高木たちの下では、光が届きにくくあまり低木も草も育たない。シダやネザサやヤツデがまばらに生えているばかりの所もある。低木にはアオキやイヌビワが多い。とくに広葉の豊かなアオキは少ない日照にも耐えるらしく、葉に斑の入ったものやそうでない雌雄の木々があちこちに散在して、育ちゆく若木には人の子供の姿のような表情がある。

枯れ落ちた葉や小枝が積もっている地面はまた地面で、高木たちの大きな根が露出して蛇のように龍のように長々と這い回り、地下でも木々たちが生存のために奮闘してきた跡を示している。

このあたりの土壌は主に崩壊花崗岩と腐葉土で、花崗岩は道にも露出したり、小石になって散らばったりしている。その小石を拾って別の小石で欠いてみると、断面には雲母が散らばり、長石は白く、石英質はきらきらと光る。

立体的な森はいうまでもなく鳥の恰好の住みかであり遊び場だ。ヒヨドリやキジバトは年中飛んでいるし、ウグイスは春先からあちこちでさえずっている。ヒバリに似て心休まる声はキビタキ、姿も声もきれいなオオルリももう来ている。シジュウカラやイカルの声も混じり、時にはそれにフクロウの「ホッ、ホー、ゴロスケホッホー」やコノハズクの「ホッ、

ホー、ホッ、ホー」が奥の方から加わる。もう繁殖期に入って、森の中はさながら多声音楽の劇場だ。毎年声の待たれるホトトギスはもう少ししてからだ。

木の枝から毛虫がすうっと地面に向かって下りてくることがある。毛虫は小鳥たちのエサでもあるが、でも今年は例年よりも数が少ない。そこで蛾や蝶もあまり見ない。数年に一度くらい毛虫が大発生する年があつて、その時には木々にはもちろん、路面にも橋の欄干にもうようよと這っている。旺盛な食欲で葉がほとんど葉脈だけになってしまう木もある。今年はクモの巣もまだ少ない。もう少しすると森の中はヤブカが多くなる。

数日前、行く手の道の上に静止している蛇を今年初めて見た。長く黒っぽかったが、アオダイショウだったろう。枯れ枝を拾って近くを打ってやると、急いで草の茂みに逃げ込んでいった。

ゆるやかに上る道は川沿いの道とふたたび出合う近くで、左へと曲がり、いったん谷川からは離れてゆく。

森の木々たちのドラマにも少しふれておこう。人間一人一人が人間社会でそれぞれの人生の物語をつむぐように、森の木々たちにも森の中で一本一本に物語がある。生えた場所、お隣さんのぐあい、空への幹や枝の伸ばし方やかたちや大きさ、経てきた年数がすでに木ごととにちがう。中でも人の目について思いをさそうものがある。

たとえば、今はまさに倒壊せんとしているヤマザクラの古木がある。十年ほど前まではまだ少し、残った枝に花を咲かせていたのだが、命尽きてそれもなく、枯れ腐って年ごとに手足が腕がれるように次々に枝を失っていった。今はトルソー状に残った黒ずんだ幹や多少の枝が何の木ともわからぬほど常緑のカズラに巻きしめられ、幽霊のようによく立っているばかりだ。数年のうちに倒れてしまうかもしれない。あたりの空間が少し空いているところから推測すれば、昔その木はそのあたりの王者ように幹や枝を広げていたことだろう。春ごとにみごとな花を咲かせ、たまに通る人々にも愛でられていたにちがいない。そのはなやかだったころの幻が、追憶として、まだそのあたりの空間にわずかに漂っているようでもある。

斃れてしまった木は気をつけると森のあちこちに見られて、それぞれの物語をかたっている。たとえばエノキの一本でなぜか幹のまん中に内臓をえぐられた後のように大きな穴を空け、倒れたのが、隣のカシノキに受け止められてようやく立っているのがある。この春、その枝にもまだ若葉が萌えるかと気にしていたのだが、もう芽は吹かなかつた。同じように、やっばり隣の木にもたれかかって立ち枯れ、崩れ落ちるのを待っているヒノキもある。

道の二つ目の曲がり角には高さ八メートルくらいのカエデが一本立っている。まだ人の背丈くらい小さな時にはひときわきれいな紅葉を飾って、際立った美人のように目を引いたものだ。他の木々から少し離れているので、年々のびのびと成長して大木にはなったが、ねび劣りの感なしとしない。枝を横に広げた結果、この春、道にかぶさってきていた大枝は

誰かにへし折られてしまった。

その近くでは、ヒノキとアベマキの太木が踵を接して数十年のドラマを演じている。下方でヒノキの太い露出した根が二本の足ののように横に伸びてアベマキの幹の下をプロレスの技みたいにしつかりとはさみこんでいる。見るからにアベマキは窮屈そうだが、それでもごつごつしたコルク質が覆う幹は十分に太っている。たぶんアベマキがまず生えていくらか伸びたそばにヒノキが生育して傍若無人に根を伸ばし、それに抗しながらアベマキの幹が太っていった結果なのだ。二本とも高三十メートルほどの背丈になり、樹上でも競い合つて枝葉を広げている。またもう少し進んだ所では、ヒノキとエノキが太い幹どうしをくっつけ合い、それでいて両方ともやはり大木を誇っている。

また道を曲がって行くと、流れの音が急に高まる。ふたたび谷川に出合う所は砂防ダムの上部のそばで、ダムから滝がどうどうと流れ落ちている。ダムのそばにはかんたんな説明板が立っている。「海拔三〇二メートル 高さ一六メートル 長さ五一メートル 完成一九四六年三月」。七十五年以上前のそのころ、敗戦間もないころ、どのような人たちがどれくらいの人数と機械でこの森の中に入って何日かけて工事をしたのだろう。そのころのこの森はどんな景色だったのか。

ダムの上方は川原が広がりまん中を浅い川が流れている。左右の山の間には青空がすいている。川原の奥まで入って流れの近くの石に腰を下ろせば、岩間や石の上を走る力強い水音が急に耳朶を打つ。言葉を探ってみても、流れの音の形容はいつもむずかしい。少し離れた川面の方でカジカガエルが小鳥のような澄んだ鳴き声をたてている。

さらに奥の方には、もう一つ上にかけられた砂防ダムを下る小滝の白い筋が見える。まわりの山の斜面はすべて新緑で埋まり、大手を広げて日の光を受けている。微風が皮膚をさすって過ぎ、水が匂う。

さてでも、もうわずらわしいので言葉は捨てよう。分別は要らない。五感をそのまま外界にさらし、気や光、木や土や水のにぎわい、あるいは空白をただ感じるにまかせていたい。物の名前の以前へと返るのだ。

## ふ だ さん 普 陀 山 へ

内山智太郎が、五日間ほどいっしょに東北地方を旅した友人二人と別れて、普陀山に行くために一人で上海に入ったのは昨日の夜だった。三十二歳で高校教師の智太郎は、実家が寺

だというせいもあって昔から古仏や古寺に興味があり、古寺や遺蹟が散在して珍しくも全島が観音信仰一色に覆われているという、杭州湾沖の舟山列島にある普陀山島の見学をこの夏休みの中国旅行では最も楽しみにしていた。事前の調べで、その島は古代や中世の有名な日本僧がたびたび訪れたらしいことも興味を引いた。

故郷の住職の父親からも、せっかく普陀山に行くのなら中国の仏教についてよく学んでこいと言われていた。父親はやがて自分を実家の寺に戻して住職を継がせる考えを今も捨てていない。それは今まで拒否してきたものの、智太郎は実はこのごろ迷っている。生々しい教育の現場でいろいろな生徒や同僚たちと交わる経験を重ねるうちに、人としての生き方とか、信仰とかがあらためて自分の抜き差しならないテーマになってきたのだ。それに自身の結婚もそろそろ目の前の課題の一つである。もしかすると中国仏教を代表する聖地の一つだという普陀山島への旅は、このごろ迷いがちな自分の生き方への一つのヒントを与えてくれるかもしれないという淡い期待も抱いていた。

今朝は早起きをして、ホテルの近くの人民公園を散策した。早朝にもかかわらず、園内のあちこちで老人たちのグループが気功や太極拳をやっていた。智太郎は武術にも関心があるので、一つの太極拳のグループの後ろについて型を習わせてもらった。後で智太郎が日本から来て少し中国語が話せるとわかると、老人たちは近寄ってきて気さくに言葉をかけてくれ、菓子や飲料を恵まれた。日中は以前来た時には行けなかった魯迅公園と国立博物館を訪れて中国のふとこの深い歴史に触れ、大いに満足した。得た知見や資料は新学期からの歴史の授業にも生かせそうだ。昼間はそうしてのびのびと心身の快い刺激を楽しんだのだ。つた。

そして夜のことだ。まだ十代と思われるウエイトレスの多い感じのよいレストランで食事をした後、上海一の繁華街、南京東路を、どこまでも続くネオンの洪水に驚きながら軽装で歩いていた。すると人々の流れの中からファイと小柄で黒っぽい衣装の若い女が目の前に現れ、擦り寄ってきて、

「マッサージはどうですか？ 四十五分、六十元、安いですよ」と日本語で話しかけてきた。食事の時に空けたビールの酔いも手伝い、一日中歩き回った疲労も感じて、それもいいかと承諾すると、すぐに車の走る通りに導かれ、タクシーで連れて行かれたのはどこかはわからない下町風の裏通りの古そうなビルだった。階段を上って三階のバーのようなところではばらく待たされたあと同じ階の個室に案内され、そこで待っていた別のやはり黒っぽいワンピースを着た若い女のマッサージをソファアーに寝ころんで受けた。でも華奢な体のその女のマッサージはひどく下手で力も弱く、大柄な智太郎を持て余すようだった。ものもの分もたないうちに女の息がはずんできたので、智太郎は「もういいですよ」と制して、あとはソファアーに坐って出された冷たいお茶を飲みながら女とぼつぼつ話をするようなことになった。

女は笑顔をたたえ控えめな感じだったが、流暢に日本語をしゃべった。だんだんと話していくと、女が今の日本の政治や株価や文化、それにたとえば「京都の人はなかなかほんとうにはよそ者を受け入れませんよね」などと、よく日本の事情に通じているようなのがふしぎだった。東京にも会社の人と行ったことがあると言ひ、さかんに日本へのあこがれを口にした。医学を学んでいたが途中であきらめた、若い時はいろいろ経験して、将来は小説を書いて作家になるのが夢だと、足が地についていないようなことも話した。商売用の作り話も混じっているのかもしれないが、会話自体は知的といつてよかつた。智太郎が明日は船で普陀山に渡るつもりだと話すと、

「フダサン？ ああ、普陀山のこと。いいですね。普陀山には中国で大変有名な大きな観音像が立っていますよ。夏は海水浴でも人気があります。私もいつかぜひ行ってみたい」と大きな瞳を光らせた。ただのお愛想には聞こえなかつた。

話はそれなりに楽しかつたが、店のふんいきに初めからなんとなくいかがわしさを感じていた智太郎は、十分余り話した後、

「それではもう出ます」と告げ、料金とチップとして二百元を女に渡した。すると女は礼を言つて、

「待っていてください。ママさんと呼んできますから」と部屋を出ていったが、なかなか戻つてこない。

五分くらいして、代わりにアロハ風のシャツを着たくずれた感じの男が二人入つて来て、請求書を智太郎の鼻づらにつきつけた。見るとサーブिसだつたはずのお茶代が、女の分と合わせて二千八百元と書かれている。日本円では約四万二千円だ。智太郎が、

「これは何ですか？ 代金はもうさっきの女の人に払いましたよ」と言つと、

「それは女へのチップですよ。お茶の代金はまだもらつていない」といなしてくる。

智太郎は、どうやらうわさには聞いていた日本人狙いのぼったくりに型通りにはめられたようだどわかり、内心苦笑せざるをえなかつたが、ともかくその法外な料金の支払いは断り、そのままドアから出ていこうとした。だが男の一人が前に立ちはだかつた。もう一人の年かさの男と押し問答になつた。智太郎は「社長」だというその男の手から請求書を取り上げ、

「これを公安に持つて行きますよ！」と声を荒げた。

男たちも気色ばみ、

「そんなことをしたら、あなた、ただではすまないよ」とすごんだ。しかし中年に近い男たちの体格は貧弱だつたし、あまり融通のきかなさそうな外国語も迫力に欠けていた。

そのうち「ママさん」だという三十女も入つてきて、やはりカクカクした日本語でウソの多い理不尽なことをまくし立てたが、智太郎は力づくでも出ていくという姿勢をくずさなかつた。

「私は日本で空手の先生をやっている。君たちをやっつけてここを出て行くくらいはかんたんなことだ」と逆にいささかすごんで見せ、にらみつけた。学生時代にクラブ活動で空手をやり、その昔とった杵柄で今の勤務先の高校でも空手部の顧問をやっているのは事実だが、このごろ身体はすっかりなままっている。その時にはガラスのドアの外にも見張るように男が二人立っているのが見えた。内と外で男が計四人だが、いずれも身体は大きくなく、そう若くもない。実際こいつらが腕づくでくるなら、よしやってみようと智太郎は決めた。レストランで飲んだビール二本の酔いも手伝ってか、怖れてこちらから折れようとは思わなかった。

勝敗の予想はひいき目に見て五分と五分。しかし相手が凶器を出してきたら別の話になる、ともいっくらか冷静に考えた。また素手でやり合ってたとえ勝てたとしても、どちらかが流血でもして公安が来る騒ぎになったらただではすむまい。異国の警察や法律事情は勝手が知れない。つかまつて調べられ、帰国が少し遅れるだけならまだしも、収監され傷害罪としてこの国の法律で処分されるかもしれない。それが日本に知れたら職を失うことだってありえよう、と瞬時に悪いほうへと想像が広がると、気合にもブレーキがかかった。

かといっておめおめ相手の言いなりに金は払えない。こいつら皆日本語をしゃべるが、今までこうしてバカな日本の男どもをたくさん引つけてきたのだろう、しかしいつでもそううまくいくわけではないことをわからせてやろう、などとはやりもしながら、ともかく相手がどこまで本気なのかを見きわめるためにもいったんは強く出てみる必要があった。智太郎はここは母国語のリングで戦うほうが得策だと考えて、中国語は口にしない。

距離を置いて数人に囲まれた中で、智太郎は一步飛びすさり、足を少し開き左半身になって両拳を構えた。広くもない薄暗い部屋の中で、リュックを背負つてのこんな格好はマンガだな、と自嘲もした。それでも一八三センチの偉丈夫である智太郎の構えに、近くの三人は少し後ずさった。そして互いに顔を見合わせながら早口の中国語でしゃべりだした。上海語なので智太郎は皆目わからなかったが、でも急に入口のドアのそばにいた「ママさん」が折れた。表情をくずし、かん高い日本語で、

「あなた、きつと誤解してる。これは日本の円よ。日本円で二千八百円よ」

智太郎が、そういう手もあったかとそのウンになかばあきれながらも、「日本円？」と聞き返すと、男たちも、そうだ、日本円、誤解してる、とにやにや笑う。

「だから人民元では二百元でいい。二百元払ってください」

それとても払ういわれはなかったが、まあ十分の一以下に値切れたのだからと、智太郎は結局承諾して財布を取り出した。相手がしつこく要求するのでさっきの請求書は返したが、代わりに領収書を要求した。

「何のためにそれが必要か？」と「社長」がやや警戒しながら訊く。智太郎は、「記念にですよ」と答えた。

「社長」が店の奥から持ってきたそれには、「按摩代、百四十元。茶代、六十元」ともつともらしく内訳が書かれていた。しかし押印がないのを見落としてしまった。

そうして智太郎はようやくその三階の部屋を出ることができた。階段を下りてそのビルを出た。監視役なのか、タクシーに乗るまで男の一人がまつわりついてきて、「私、弱いよ」と媚びるように笑った。実際、客を腕力で脅すには迫力に欠ける風体だった。

「こんな商売はやめた方がいいですよ」と智太郎は彼に言ったが、よけいなことだった。タクシーに乗った智太郎に「再見！」と男がごきげんな顔で言うので、つい同じように返事をしてしまったのもお笑い草だった。

後になって智太郎はひやりとした。公安の恐ろしい国だからあの程度ですんだのか。いちおう客を脅しながらも、彼らもたしかに騒ぎになるのは恐れていたふうだった。別のもつと獐猛な連中だったら、あるいはここが香港やマカオだったらあれではすまなかったかもしれない。いや、連中からすれば、結局素人マッサージとお茶一杯で四百元巻き上げたわけだから悪くはない商売だ、途中で急に折れたのも手口の一つだったのかもしれないとも思われた。ホテルに帰ってそうしてさまざま思い返すと、自分の言動はいかにも隙だらけで愚かしかった。

冷や汗や脂汗も混じった一日分の汗をシャワーで洗い流し、明日の準備をしてからベッドに入ると、あのマッサージの女ももちろん一味の一人だったわけだ、とあらためて思い返された。女がした話にもウソが混じっているのだろうが、智太郎は怒る気になれなかった。あれだけの日本語を習得するためには相当の勉強をしたはずだ、大学を出たのか、それともほんとうに日本に興味を持って独学したのかと若い女の来し方を、少しは教師らしく考えた。会話に慣れていたのは、もしかすると日本に観光ビザで入ってどこかの街で接客商売をもぐりでやっていたのかもしれない。「若い時はいろいろ経験して」と言っていたが、上海でする日本人相手のぼったくり商売もその「経験」の一つなんだろうか。普陀山を知っている、行ってみたいと言っていたのはほんとうのことらしかった。まさかあの女が、普陀山観音の化身身で、前もって上海の街で自分の前に現れてくれたわけでもなからう……。

ただでさえ冷房の効きが悪い部屋で、智太郎はなにやら寝苦しかった。明日は早く出てバスで上海の外れの芦潮港まで行き、高速船を探して乗らなければならない。窓の外からの光でほの明るい中に仰向きながら、日本語を上手にしゃべった女の華奢な姿やたたずまいになおとらわれていると、普陀山が遠かった。

## 正月の過ごし方

「あなた言ったじゃない！ 元旦は無理だとしても、二日と三日はいつしよにいられて。約束がちがうでしょ。あたし、もういっぱいお買物しておせちを準備してるのよ。どうしてくれるの？ 今ごろドタキャンなんて、そんなのダメよ。あたし、ゼツタイ認めない。認めないからね！」

康祐が言いにくそうに切り出して予定の変更を伝えたら、案の定、電話の向こうで朋代は怒りだした。

「無理言うなよ。急に仕事が入ったんだよ。警察なんだから、しようがないだろ？ 悪いとは思ってる。また今度埋め合わせするからさあ」

「康ちゃん、あのさあ！ あたしのこと、そんなに軽く考えないでよね。あたしがどれだけ今度のお正月を楽しみにしてたか、初めていつしよにすぐせるお正月だと思って張り切っていたか、あなた、わからないでしょ？ そんなこと急に言われてどれだけあたしが悔しいか、わからないでしょ？ 仕事が入ったという言い訳もおかしい。警察といってもあなたは生活安全課なんだから、正月休みはふつうにとれるはずでしょ？ 去年も一昨年もそうだったじゃない。それが今年に限ってどうして？ ゼツタイおかしい。ありえないわ。ウソついでるんだね？」

「ウソって。朋ちゃんまあ、そう興奮しないで、冷静になつてよ。今、ストーカーやら虐待やらのややこしい案件をかかえてるんだ。部下たちが正月も出勤するから、責任上オレだけ休むというわけにはいかないんだよ。わかってくれないかなあ」

「どうして二日も三日も？ いくらなんでも二日間もぶっ続けってことはないでしょ？ 勤務が終わったらいつものように会えるわけでしょ？ たとえちよつとだけでも。それもできないなんておかしいわ。やつぱりウソね。会って話そ。電話じゃダメ。あたし、納得できないわ。このままじゃ、あたしお正月の間に狂ってしまうわ。想像してみても、自分が作ったおせち料理の前に自分が一人だけで坐ってるのよ。一人でまずいお酒飲むのよ」

「オレも会って話したいけどさあ、今は無理なんだ。だから電話したんだよ。無理言わないでくれよ」と言いながら康祐は朋代が正月の三ガ日を狭いマンションの部屋で暗い顔で一人すごす姿を思い浮かべた。たしかに少しかわいそうだ。凄惨な感じもする。

「ああああ、そうだったわね。元旦まではご家族でいつしよにすごすわけね。奥さんとゆっくりに寝るわけね。わかったわ。もう言わない。その代わり、バイバイしよ。もうあなたなんかとは絶対会わないから！」

朋代はだんだんエスカレートしていく。

「怒るなって。たかが正月休みのことじゃないか。一回だけのことじゃないか。今までにも都合ができて急に会えなくなったこと、あったじゃないか」

「たかがって。あなた、たかがって言うの？ やっぱりあなたわかってない。あたしの気持ち、ぜんぜんわかってない。悔しい……」と電話の向こうでとうとう朋代は泣き出してしまった。

今までも小さな諍いをして康祐の前で朋代が涙を見せたことは何度かある。ついこの間、ふとことの成り行きで別れ話が出た時もそうで、あの時はいささか手を焼いた。つきあって約二年半、朋代の気分がこのごろ不安定だと康祐は感じている。二人の関係を康祐は動かしてみようとはしないが、朋代はどうしてか揺さぶって、自ら深みに落ち込もうとするところがある。朋代はその深みに康祐もいっしょに引きずりこみたいみだ。康祐は朋代の中に潜んでいるそんな気持ちを厄介だと思った。だからそうした朋代の心理にあまり向きあわず、目をそらしてきた。すると朋代はあなたは私を愛していないといって泣くのだ。いままた朋代は小さな爆発を起こしそうだ。爆発は困る。

「朋ちゃん、わかったよ。オレが悪かった。会おうよ。会ってきちんと説明するよ。時間ちよつとしか取れなくて悪いけどさあ、今から急いで出るよ」

内心うんざりしながら、でも声の調子は何とかつくろった。部屋の掛時計はもう十時過ぎている。年の瀬のこんな時間に外出とは、妻にまた小さなウソをつかねばならない。

朋代のマンションの近くで朋代を拾ってから、康祐は港に向かって二十分ばかり車を走らせた。埠頭の一角に車で入りやすくあまり人の来ない場所がある。二人で海の空気を吸いたいとき、たまに行く所だが、でもこんな遅い時刻に行くのは初めてだ。

助手席の朋代は、車が走っている間は康祐が話しかけてもずっと黙りこくっていた。ろくに返事もなかった。その、外からの流れる光の中に浮かぶ、目を張って唇を尖らせた横顔を康祐は醜いと思った。こんな女とどうして長い間つきあう破目になったのか、と時々やって来る悔恨に落ちていきそうになった。でも今はそんな反省に浸っている余裕はない。

車をいつもの場所に停めた。康祐は淀んだ空気を吐き出すように、運転席のドアガラスを下ろした。が、全部下ろすとたちまち寒気が侵入して来て、すぐ三分の二ほどを戻した。暗い海面に対岸のビルの窓の光が落ちて揺れている。並んだ灯明のようで、妙にきれいだった。朋代が康祐の方を見て口を開いた。

「あのさあ、あたし、ずっと考えてたのよ。そして、どう考えても、あなたはウソついてるとわかったの。そんな時期に仕事のわけないもの。ね、あたしが納得するように、会えないわけを説明して。奥さんに感づかれたの？ きつとそうよね？」

「そうじゃないよ。あいつが知るわけない」

「じゃあ、何なのよ？ あなた、もうあたしに会いたくなくなったんでしょ。そうよね？ だったらそのわけを言っつてよ」

「一人合点するなよ。朋ちゃんにはいつも会いたいわって言ってるじゃないか。……オレには

朋ちゃんしかいないよ。そして朋ちゃんにはいつも感謝してる。こんな不自由な関係をがまんして、長いことオレにつきあってくれてるんだからさ。ありがたいよ、嬉しいよ」

そんなだめると、朋代のいきりたっていたものが、少しはやわらいでいくようだった。

「そんなこと言って……。わかってる。あなたの気持ち。あたしの方こそ、こんな女で悪いと思ってるわ。あなたを束縛して、無理言っさ……。でもやっぱ聞かせて。お正月に会えないわけ。理由が何であつても、あたし怒らないから。怒らないよう、努力するからさあ。だからほんとうのことを聞かせて」

康祐は頭をややうつむけて、もじもじするようだった。相手はまるで探偵のように内心を探ってくる。どんなふうを持っていつて始末をつけるか、迷った。あくまで電話で言ったおりの理由を言い通すほうがよいのか、それとも……。康祐はふだん、妻からも朋代からも優柔不断な男だと言われている。職場でもそういう陰口をたたかれてるらしい。いや、ほんとうのオレはそんな男ではない。決断くらいいつだってできる！

「電話で、仕事の都合と言ってしまったことは謝るよ。言い出しにくくて、ついそう口をついたんだ。ごめんよ。じつはねえ……」

「何よ。そんなところで言いささないでよ。あたしはもうだいじょうぶだから、言つてよ。あなたがそんなウソつくくらいだから、あなたもよっぽどあれこれ悩んだんでしょ？」

「聞いてくれるかい？　じつはねえ、二日、三日は旅行に行くんだ。二カ月も前に、あいつが正月の旅行を予約しちゃったんだ。いや、ね、パンフレットを見せられて、行こうよと言われた時、オレは半分上の空で、ああしよう、と答えてしまったらしい。その後、オレはそれをすっかり忘れちゃってたんだ。この間それを言い出されて、はっと気づいた時はおう遅かった。オレはずっと正月は朋ちゃんとすごすことばかり考えていたからさあ。でも今さらもうあいつに、旅行行けなくなつた、キャンセルしろとも言えないじゃないか。もう直前だし、人気の観光地の正月の旅館なんてそうやすやすと予約がとれないだろ？　あいつも予約取るのに苦労したはずなんだ。そんなことで、悪いんだけど、朋ちゃんとおせち食べられなくなつちゃったんだ。ほんとに悪い。このとおり、謝るよ」

頭を下げたあとで康祐がこわごわ隣を見ると、朋代の顔には意外にも微笑が浮かんでいた。ただ顔がのっぺりと青白いのは、あたりの水銀灯のせいだろうか。

「そう。そうだったの……。それでどこに？　息子さんもごいっしょなのね？」

「いや、その、熱海にね。息子はもう高校生になつて親と家族旅行なんかダサイ、行かないつて言うんだ」

「じゃあ、奥さんと二人で？　熱海に？　一日から二泊三日するのね。そうね？」

「もう朋ちゃんにはウソつきたくないから言っちゃうけどさ、大晦日から泊つてね、伊豆半島も巡るんだ。じつはオレたち、今年で結婚二十周年なんだ。それで妻が張り切ってるんだ」  
「そうなんだ。奥さんと二人でゆつくり熱海の温泉入つて、いい旅館のおいしいおせちを食

べて、伊豆半島もドライブするんだ。いい記念旅行じゃない」

「うん、まあ、今回だけはつきあうしかないと思ってね」

朋代は黙った。ぐるぐると頭の中が忙しく回転しているようだった。その中から鋭い錐が出てこないよう、康祐は祈る気持ちだった。

「あなた、またウソついたでしょ」

ぼつんと朋代が言った。しかし巫女の託宣のように断言した。

「ウソじゃない。もうあらいざらい、ほんとうのことを話したじゃないか」

「いや、あなたあたしに、さつきよりもっとひどいウソついた。あたしをダメした」

「何のことか、わからないよう」

「わからない？ あなた、ウソをつくならもつとほんとうらしいウソをついてよね。結婚二十周年の記念旅行で、奥さんが張り切ってるんだったら、予約してからのこの二カ月の間、それは夫婦の間で何度も話題に出たはずでしょ。いっしょに楽しく計画立てたり、準備したりもしたわけでしょ。最近まであなたがその旅行のことずっと忘れてたなんて絶対ウソよ。ありえない。大ウソよ。あなたはずつと正月は熱海ですごすつもりでいたんだわ。だったら何で、あたしが今度のお正月はいっしょにすごそと言った時、断ってくれなかったの？」

「うーん、それは……。ベッドである時に出た話じゃないか。気分こわしたくなかったし、それに、なんとなく、そうなければいいなあって思ったんだ。熱海なんかより、朋ちゃんといっしょにすごす正月を想像していい気分になったんだ。後で後悔したけど、できないってもう言い出しにくくなっちゃってさあ」

「それであたしに言わずに放っておいたの？ 一カ月以上も放っておいたわけ？ で、今日になってドタキャンするってわけ？ そうじゃないでしょ。あたしのこと考えてくれたんじゃないかって、面倒になってただ放っておいたんでしょ？ ちよつと後でウソの言いわけすればいいって、軽く考えてたんではよ？ あなたってそういう人よ。優柔不断で、人の気持ちもわからない人よ。わかったわ。やっぱりあたしの想像通りだった。悔しい！」

朋代がまた黙りこんでしまったのを、康祐は恐れると同時にまたオレに「優柔不断」のレッテル貼りかと腹も立った。もう康祐も意地のように黙った。

「キャンセルして」

「え？」

「旅行よ。奥さんと二人の熱海旅行よ。あたしの方をキャンセルしておいて、そつちだけ予定通り旅行に行くなんて許せないわ。当然でしょ？ キャンセルして」

「無理言うなよ。わかってくれたんじゃないのか。さつきから何度も謝ってるじゃないか。

今さらキャンセルしろって、むちゃくちゃじゃないか、狂ってるよ」

「何がむちゃくちゃよ、何が狂ってるよ。あなた、あたしには平気でウソついて、ウソを重ねて、それで奥さんには一つもウソつけないというの？ 悔しいよー！ やっぱりあたし

のことなんか愛してないんだ。奥さんが大事なんだ」

「ちがうと言ってるだろ！」

「じゃあ、キャンセルしなさい！ あたしの方が大事というのだったら、できるでしょ。あたし本気よ！」

「できないよ！」

「できないの？ じゃあ、あたしからあなたのお家に電話してあげるわ。奥さんに、お宅のご主人、お正月はあたしの家でおせち食べるって言ってます、だから熱海旅行はキャンセルしてください、って言ってあげる」

朋代はこれみよがしにバッグから携帯を取り出した。

「正気か？ 朋ちゃん、今日はどうかしてるよ、ほんとに。いいかげんにしてくれないか。怒るよ！」

朋代は携帯を握ったまま、

「何よ、怒るのはこっちよ！ ウソついてあたしをバカにしたのはあなたでしょ！ もう一度言うわ。旅行キャンセルして。あたしといっしょにおせちを食べるんだったら許してあげる。そうでないのだったら、もうあなたを殺す。そしてあたしも死ぬ」

朋代は携帯を膝に置き、またバッグの中を探って何かを取り出した。

「これ見えるでしょ？ 本気だと言ったでしょ。いっしょに死んで」

朋代のきき腕の左手に包丁の刃が光った。康祐は身体を窓側にのけぞらせながら、思わず左手を伸ばして朋代の腕をつかむ。朋代は身体を振って抗う。

「今度は脅しかよ！ オマエはどうしようもない女だな。すねるのもいいかげんにしろ！ 別れよう。もうおまえみたいな女はうんざりだ。これまでだ。一分もいっしょにいたくない。下りてくれ、さあ、オレの車から下りろ！」

みるみる朋代の顔は目が吊り上がり、口が左右に裂けて夜叉のようになった。そして目の前にある康祐の腕に噛みついた。わあっと叫んで康祐は朋代の頭を放した。朋代は叫びながら包丁を振った。刃先が康祐の頬をかすめ、痛みが走った。指で押さえるとぬるぬるしてしたり落ちた。康祐の中で何かがぶつんと切れた。血を見て驚いた朋代が脱力して、何か弱々しく口走ったが、もう康祐の耳には入らなかった。カーツとする頭の中で、「オレの人生にこいつは邪魔だ、こんな奴はもう要らない、これでやっと解放されるんだ」と思った。同時に、「ダメだ、やめる、自制しろ！」というもう一つの自分の声もかすかに聞こえたが、もう止まらなかった。左手で女の腕をつかみ、ハンドルに押しつけた。クラクションが一回、二回と不自然に鳴った。包丁が床に落ちた。自分の顔のすぐそばにある女の頭を、空いている右手で殴りつけた。女の頭はゴムボールのように助手席の側のドアガラスにぶつかってはずみ、がっくりした。はらっと髪が左右に乱れ、ヘアクリップがどこかに当たって落ちた。康祐はグローブボックスを開けて、車を出す前になんとなく入れておいた紐を取り出し、女

の首に巻きつけた。……

## 雨とラジオ

きょうも雨で仕事にあぶれたので、暇を持って余してサギやんのところに行く。なけなしの金だが、自動販売機でコーヒー缶を一つ買って持って行ってやるうと思って、途中にあるタバコ屋の脇の販売機に向かい合ったところが、さて困った。コインはある。でも買うのに熱いコーヒーがいいのんか冷たいコーヒーがいいのんか、決めかねたのだ。夏や冬ならはつきりしているのだが、こんな季節はどっちがいいのか迷うものだ。なんで常温のものも売ってないんや？ と販売機の前で首をひねっても、販売機は答えてくれない。しかたなく一本は熱いの、一本は冷たいのを買った。思わぬ出費だ。サギやんに選ばせよう。

声をかけてから塀の際のブルーシートの中に入ると、サギやんは毛布の上に坐って釣り道具をさわっていた。今やそれがサギやんの唯一の趣味だ。といって、サギやんは釣りに出かけるわけでない。サギやんの説明はこうだ。サラリーマン時代は釣りが道楽だった。休日には仲間と車を飛ばして若狭の方にも紀州の方にもよく出かけたものだ。こんな暮らしになってからも釣りは淀川や港の堤防まで行ってしばらく続けた。でももうやめた。道具代、餌代がばかにならないし、体力も落ちたので。大事にしていた道具類もたいてい売るかやるかしてしまって、今や竿一本とわずかな小道具が残っているだけだ。サギやんはたまにそれを持って近くの溝川に出かけ糸を垂らす。といっても餌はつけていない。そんな恰好をしているだけで気分は悪くないのだという。

「どっちがええ？」と両手の缶コーヒーをさし出すと、サギやんはちよつと迷ってから熱い方を選んだ。冷たいのは腹に悪いと思ったのかもしれない。

かたわらでラジオが鳴っている。ニュースの時間のように、アナウンサーが何かしゃべっているが、ボリュームが抑えてあるのでよく聞き取れない。

「ニュース、よう聞こえんなあ」と言うのと、言下に、

「ほんなもん、聞こえんでええんや！」とサギやんは一喝する。

「ラジオのニュースなんぞ、ウソばかりやん」

「そんなら聴かなんたらええやろ？」

いきなり怒鳴られたので、オレもちよつとだけ向きになる。コーヒー買ってきたるんやなかった。

「オマエさんなあ、人生、そう単純やないんや」と、ちよつと顎をしゃくするように動かしてこつちをにらんだのは、サギやんのいつもの講釈が始まる気配である。こう始まりそうになると、あいつのひねくれたリクツはかなわん、と言つて逃げ出して行く奴もおるが、オレにはそのひねくれぐあいがけつこうおもしろい。まあそれなりに人生経験豊からしいサギやんのは、ひねくれの中にだいぶホンマが混じっているような気がして、ためにもなる。人間、向学心を忘れたらあかん。

「ラジオというのはなんや？　どんなもんや？　広うに世の中を知るための一つのツールや。そやろ？」

ほら始まった、始まった。まあサギやん、短かめに頼むで。

「ラジオ聴いてたら、世間で何が起こっているのんか、何が流行っているのんか、知れるやろ？　ほんで、ここにはテレビもパソコンもないやろ？　オマエさんも同じやが。そうなるど、ワイらにとつては、広うに世間を知るために残された唯一のツールはラジオや。そやろ？　そやけどや、長い間人間やつて長い間ラジオ聴いてくると、つまらんとこやウソつぽさ加減もようわかつてくるやんか。聴いとつて腹立つこと多いで、たまらんで、そやないか？　そやから、適当に聴き流すのやがな。人生の苦勞を受け流すみたいにな。それがラジオを聴く極意ちゆうもんや。適当に聴き流そうとしたら、ボリューム、小さあなるんや。まあ、電池代の節約にもなるしな」

そやけど、と喉に出かかつてやめた。そんなこともあるんやろう。

「放送がウソつぽい、つまらん、たまらん、いうのんは、いったいどういうこつちや？」

「言うたろか？」

「おお、聞いたるか？」

おたがい顔を見合わせて笑つた。サギやんの顔は笑うと人なつっこいが、歯が二、三本欠けているのでちよつと不気味なところもある。

「たとえばやなあ」とサギやんはもつたいぶつて始める。

「春と夏に、高校野球の放送、ラジオで長々とやるやろ。朝から夕方まで日がな一日中、やつとるやろ。あれ、オマエ、どう思う？」

「まあ、ええんとちやうか。なんぞ仕事しながら高校野球楽しんどる人、世の中にはけつこういてはるやろ。地元のチームの試合やつたら、応援したいやろ」

「そやけど日がな一日中やで。沖繩から北海道まで、津々浦々やでえ。野球に興味ないゆうリスナーはどうなるんや？　野球人気、今どき落ちとるで。そんなもん、試合しとるチームの地元でだけ流したら十分やんか。それに、高校生のスポーツ大会はほかにもぎょうさんあるのに、なんで野球だけが特別扱いなんや？　ワイ、このこと昔からふしぎや。ほんで、子供らを材料にして取り巻きの大人らが美談ばつかり製造して垂れ流すのも、えらいかなんで」

「ほんでもなー、一生懸命練習してきた純真な子供らが一生懸命に白球を追う、そこに皆が感動しとるんとちゃうんか？ 気分よくなるやんか」

「おう、そりやまあわからんでもない、ワイもそんなふうにして聴いてた時代もあった。そやけどなんちゅうても、やつとるのんは十代の高校生なんやぞー。野球ゆうても、まだまだ発展途上の未熟な野球ゆうこつちや。なんでもなあ、未熟な芸はあんまり見とうないやろ？ それにな、オマエ、わかるか？ 高校野球ちゅうのはな、アメリカ七分、日本三分の合作なんやぞう」

「よう見えん話やなあ」

サギヤんは右手にコーヒー缶を持ち、左手で自分のごましお頭を指さす。

「ここ使てちよつと考えてみ。野球はアメリカから来たもんやろ。来たのは遠く明治の時代やが、問題は敗戦後のことや。占領軍はな、日本国民を手なづけよう、ちゅうわけで、日本国民にアメリカで流行つとる娯楽を与えた。日本人をアメリカナイズしてもたろう、ちゅうわけや。昔の大衆の娯楽ゆうたら、なんや？ まあ、代表的なもんは映画に音楽にスポーツや。アメリカ映画にアメリカ音楽。ほんで、ベースボールの奨励もその一つやったんや。日本人に野球に熱中させとつたら、妙な反抗もせえへんやろ。それに、どしても野球の本場のアメリカを崇拜するようになるわ。ほんで、現状はその企み通りになつとるやんか。作戦大成功つてやつや。ほんで日本人のほうはやなあ、その野球に、日本人の好きな精神主義ちゅうやつをもちこんだんや。まあ根性とか忍耐とか鍛錬とかいうやつやな。滅私奉公も入つとるで。ほれで今見るような日本式高校野球の誕生や」

「なんや、敗戦とか占領とか、ちよつと複雑やなあ。そうか、日米合作ちゅう見方もあるか。……まあ、先生、野球はかりにそうやとしてもやで、相撲はどうだんねん？ ラジオの大相撲の放送。あれも一年六場所、場所中の放送時間、えらい長あおまんて」

「ようゆうた。次はそれを言おうと思つたんや。あー、あれもかなんな。ええ加減にせえ、言いたい。あのまーるいちちやい土俵の上でのたつた二人の人間のかしあいを、アナウンサーが天下の一大事みたいに声張り上げて放送しよるもんなあ。ノコッタ、ノコッタ、ワー、ワー、ゆうてな。あれも津々浦々やで。ほんであれは日の丸、君が代や。国技ともゆうやろ。相撲はな、古事記ちゅう古い本に書いたある、ノミノスクネとタギマノケハヤの勝負から始まったんや。相撲は日の丸への奉仕、野球は星条旗への奉仕、つてわけやな。」

そやけどこゆうてもワイはな、べつに野球や相撲自体が悪いゆうてるんやないねん。本人がおもしろい思たら大いにやつたらええし、見たらええ、聴いたらええ。自由や。ほんで、国民には、そら娯楽も必要や。つらい仕事して疲れてストレス溜めて家に戻ってきてやでえ、ビール一杯やりながら、嫌なことは措いといて深夜に野球や相撲のダイジェストを見る。そら心の癒しにもなるやろ。ワイもそんなサラリーマン時代があったんやでえ。

そやけどな、いつばいの税金かけて構えた国民の電波の設備を使うて、そんなもんを長々

と垂れ流すな、ゆうてんねん。節度を守れ、ゆうてんねん。それにな、ラジオゆうても、ジャーナリズムの一端やる？ 世界の政治経済事件事故戦さ、日本の国社会のこと将来のこと、国民の命や暮らしにかかわる問題は今や山積してまつせ。伝えないかん、考えないかん。大事なことはほかにいっぱいありまつせ」

「うーん、まあなあ。そうゆうたらなあ。そやけど、先生、ラジオの放送で役立つもんもありまつせ。オレ、ラジオの天気予報は毎日聴いてるで。聴かん日はない。明日は晴れか雨か、暑いんか寒いんか、オレらには直接に大事なことや。明日仕事あるかないか、それにかかわるもんなあ。しかもな、昔とちごうて、このごろの天気予報、だいたい当たるやろ？」

「オマはんはほんまに素直な人間なんやなあ。ええことや、あきれるわ。人生、シアワセやろ。そやけどそんなんやつたら、悪いもんらにすぐにだまされてまうでえ。天気予報、そらワイも聴いとるわ。たしかに役に立つ。そやけどあれの自身は気象庁の仕事やで。べつに放送局が苦労して調べとるわけやない。ワイが腹立つのんは……」

「なんや、サギやんは天気予報にも腹立つんかいな」

「そうや。ワイが腹立つのんはな、その自分で苦労して調べたわけでもない情報を、お天気お姉さんが自信をもって言いすぎるところや。巫女の託宣みたいに言いよる。ほんで、雨や風がなんや悪いもんのように言うのもおかしで。五風十雨ちゆう言葉があるやろ。五回風が吹いて十回雨が降ってこそ作物がよう育つ、ゆう昔の人たちの知恵や。全国にはいろんな仕事の人がおるんや。サラリーマンばかり頭に思うてたらあかんやろ。ワイの田舎ではな、雨が降ったら年寄りたちが、「ええオシメリですなあ」ゆうてたがいに挨拶しとったわ。「ええオシメリですなあ」、なんと味のある、ええ言葉やないか。

そもそもの、天気は人間のもんやないで、自然のもんや。自然界には動物もおれば植物もおる。晴れとか雨とかも、気温も、全部の生きとし生けるものに関係するんや。水がほしなあ、風が吹いてほしなあ、思てる山の木もきつとあるやろ。もつと寒うなつてほし思てるオホーツクのアザラシもおるはずや。天気を人間中心にだけ考えたらおかしいやろ。バチが当たると。

それからなあ、このごろのお天気お姉さんはあせえ、こうせえと細かいこといいよるのがうるさいわ。やれ折られたみ傘持っていけ、洗濯物干せ、薄いコートにしる、とかなんとか。おせつかいやめろ、放つといてくれ、つて思わんか？ 傘させん人も洗濯物干せん人もコート持っていない人も出かけん人も、世の中にはいっぱいおるやろ。ほんで北海道は寒うて沖繩は暑いゆう日もあるんや。日本に暮らしとんのは首都圏のサラリーマンだけやないんやで。まあ、本人は一言添えて、自分ほんまに気づかいはできるやさしい人なんですよ、とリスナーに思てほしいんやろが、そんな出番が終わったらすぐ忘れてしまうような安っぽいやさしいふりなんぞ、いらんで」

「あんた、なんぞラジオに恨みでもあるんか？ 昔放送局に意地悪されたとか、なんかあつ

たんか？ それでなかったら、よっぽどヘソ曲がっつるで。ようそんな細かいことに気いづくなあ。あきれるわ」と返しながら、じつは言われてみるとそのとおりかもしらんと感心しているところもある。天気は自然で生きとし生けるものみんなのもの、か。そやったら、天気ちゅうのはじつに雄大なもんや。アフリカのソウに向けて天気予報したつたらどんなんやろ？

「ほかに、ラジオにどんなイチャモンがあるねん」

サギヤんは残りのコーヒーを飲み干すと、オレをちよつとにらんだ。

「まだいろいろとある。そやけどもうしゃべるの疲れたわ。面倒や。ちよつと待つとれ」と言つて後ろを向いてダンボール箱の中を探りはじめた。それは雑多なものを入れている箱だ。三十秒ほどごそごそやっていたが、おう、これこれとサギヤんは一冊の汚い大学ノートを取り出してきて、あるところを開いてオレに渡した。表紙を見ると、マジックで「省察 一九九九年六月」と書いてある。セイサツ？ セイサツつて、なんのことや。ケイサツの親戚か？ それとも毎日三遍反省する、つてやつか？

「ラジオのことはだいたいそこにメモしたある。テレビのも入っつるけどな。それ目え通したら、ワイの言いたいこと言いたいわかるはずや」

開かれたページには「ラジオ・テレビについて」と小題がつけられた下に、ボールペンのけつこう達筆の文字が並んでいる。それは四、五ページにもわたり、箇条書きでずらつと並んで、これは何十項目あるんや？ 長うてかなんから、オレは上から下に、おもしろうなところだけを拾い読みしていく。こんなぐあいだ。

・「午前も午後も深夜まで、長々しい退屈なトーク番組、なんとかならんか。ラジオ番組の制作予算、少ないのはわかるけど、もつと工夫はできるはず」

・「歌を流す時、「○○の□□」と歌手の名前を呼び捨てにするのは止めよ。アナウンサー、オマエはいつたい何様のつもりか。「○○さんの□□」とちゃんと見え」

・「しょつちゅうアメリカの歌を垂れ流す。ちよつと気い抜いてたら、米語の歌が流れてる、というぐあい。老人たちが主なりスナーの番組でもそれを気遣いもなしにやる。まるでご飯味噌汁にハンバーグのおかずをつけるようなこと。これもたぶん占領時代から続いている悪習だろう。日本人の耳をアメリカナイズしろと、今もアメリカさんのお達しがあるのだらう。外国の歌を流すのはええが、どうしてUSAの歌だけなのだ？ お隣の韓国、中国、アジア、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカ、ヨーロッパ……の歌と、外国の歌ゆうたら歌はどここの国にもどの民族にも豊かにあるやろうが」

・「アメリカの国内ニュースをそのままあたかも国際ニュースとして垂れ流すな。国のトップの選挙や交替の時の報道も、アメリカ大統領の場合だけ詳しく、長すぎる。日本はいまだ軍事・外交・政治・経済から文化まであの国に牛耳られている属国やとしても、もつと主体性を持って。アメリカばかりに多い支局や特派員の配置を改めよ」

- ・「解説委員という連中。角がすっかりとれてしても体制に去勢された連中ばかり。批評らしい批評はなにもできぬ」
- ・「ニュースで皇族にだけ敬語を使うのはやめよ。皇族だけ特別扱いすることが社会に差別を生む。憲法にうたつとるように人は皆平等であるべき、天皇も国民の一人だ」
- ・「ニュースをやる時、「街の声」を流すのはうそっぽいから止めてくれ。市中で意見を拾っても、結局それを局で選別して流すのだから不公平。双方向を気取る詐欺の類なり」
- ・「ニュースやその解説で、アナウンサーやキャスターが貧困者に同情するふり、やめろ。貧困のじっさいが、あんたら高給取りにわかるわけない。局員の給料を三分の一に減らせ。そしたら多少身に染みてものが言えるようになる」
- ・「その時だけの、頭で考えただけの「やさしさ」のふり、やめよ。虫唾が走る。女子アナウンサーの、「ワタシかわいい、賢い、やさしい、いいひと」ぶり、笑い声、やめてくれ」
- ・「大河ドラマは歴史を歪曲する。大量殺人者たちを英雄として描いてはいけない。朝ドラのうそっぽさ。毎回大人数で、下半身抜き仲好しごっこ、やめろ。若い視聴者が人生というものを誤解してしまう」
- ・「アナウンサーが日本語の朗読、会話の模範とは誰がお決めになった？ 冗談いうなよ。個性を削がれて無個性になった連中の話し言葉が生き生きするわけがない。ワイのおばあちゃんは無学やったけど、よっぽど気持ちのこもったしゃべりができたぞ」
- ・「国策宣伝放送局なり。今も戦前に同じ。批評精神なし。なにか起こるともっともらしい顔して御用学者や解説委員が出てきてウソをばらまく。あの原発大災害と今度のコロナ騒ぎでよくわかったぞ。税金使ってもよいから、政権からは独立して権力にも申せるしっかりしたマスメディアがつくれんものか」
- ・「ジャーナリズムは世の中に起こったものごとをまず客観的論理的に捉えないといけない。日本的な、情に訴え情に流される解釈やその流布は、事からの真実を隠蔽してしまい、犯罪的である」
- ・「オリンピックの前や最中、日がな一日オリンピックをやるな。島国の悲しさ、この国は「世界的権威」なるものにからき弱い、弱すぎる。その「世界的権威」なるものをなぜ疑わない？ 巨大商業資本の操るオリンピックゲームに狂奔する国の数は、世界を見渡せば少ないらしいのに」
- ・「アカデミー賞、がどした？ アメリカ国内の映画賞やろ。メジャーリーグ、がどした？ アメリカ国内の野球やろ？ ノーベル賞、がどした？ スウェーデンの一財団の賞やろ？ 裏にいろいろ思惑あるから、変な人たちももろう」
- ・「このごろの台風報道はひどい。いくら気象衛星の技術が発達したとはいえ、台風がまだ遙か南方における卵の時から、台風来る、台風来ると言い立てる。じっさいは並以下の台風でも、さも巨大台風が来るように騒ぎ立てる。恐怖心に訴えるのがいちばん視聴率を取れ

るといふ放送人のさもしい魂胆によるらしい。台風が東京に近づいた時の騒ぎようは特にひどい。特別番組を組んだりして。しかし、日本は四方に広いんやぞ。自分たちがおる所やからとゆうて、何でも東京中心はおかしい」

また天気の話になったところでもう読むのを止めた。あんまりうまもないもんをたらふく腹に詰めこんだような気色悪い感じがしながら、オレはノートを閉じて返した。おもしろいところも、同感するところも、せんところも、ようわからんところもあつたが何も言わなかつた。ただ、

「よう書いとるなあ。あんた、いったい何もんやねん？」と訊いた。また釣り道具をさわっていたサギやんは顔をあげ、齒の欠けた口を開けてニツと笑つた。

「ただのひねくれもんや。コーヒーうまかつた、ありがとう」

雨粒が線を引いてシートの斜面をすべり落ちる。昨夜からの小雨はまだ上がりそうもない。

## テンバツばあちゃん

三〇三号室には皆に「テンバツばあちゃん」と呼ばれているおばあちゃんが入っている。本名は加胡秋子というので、二年ほど前に入所してこられた。加胡さんは脳梗塞の既往症があつて左側の手足にマヒがあるが、補助杖を使って自力で歩行でき、食事も排泄も一人のできるのであまり手がかからない。長年鍼灸師の仕事をしてきた人で、自分で自分の身体のことによくわかり、薬はできるだけ服用せず、自室やリハビリルームでストレッチをするのと朝夕三、四十分ずつの散歩を日課にしている。おおらかでおだやかな性格の人で、スタッフとも他の入所者とも落ち着いた笑顔で接する。それで人気があつて、加胡さんが庭に散歩に出るとあちこちから声がかかる。いっしょに話しながら歩いたり、ベンチで談笑する仲間も多い。

担当になつて以来、ボクは忙しい合間、そんな加胡さんとの会話を一つの楽しみとしている。入所者とよくコミュニケーションをとることも介護の大事な仕事の一つだ。加胡さんはたまに、政治家か誰かについて話した後、「テンバツよ！」と言う。悪い奴だからテンバツを与えよ、という意味だ。本人はまじめに憤っているのだが、それがどこか上品な感じで言われるのでおかしく、ボクらはいつ笑ってしまう。それで皆は親しみをこめて「テンバツばあちゃん」とあだ名して呼んでいるのだ。

部屋を訪ね、「いかがですか？」と訊くと加胡さんはたいてい「まあまあよ」と答えて医療人らしく自分の身体の状態を的確に話してくれる。それからは自分のことよりもむしろボクのことを訊いてくれる。もう八十歳を越えているのに記憶力がよく、ボクの家族関係とか経歴とか志望とか、一度聞いたことはほとんど忘れない。しかも適度に親身になって聴いてくれるのでボクは心地よい。それらも長年の鍼灸の仕事で身に着いた態度なのだろうか。

でも加胡さん自身は自分の身の上のことはあまりしゃべりたがらない。家族関係は少し複雑なことがあるようだ。ただ、一人のお孫さんをすごくかわいがっている。今は新型コロナウイルス禍でホームの規則で面会が制限されているので月に二回ほどだが、大学生のお孫さんが見舞いにやってくる。彼女はいつも笑みをたたえてやさしそうで、髪の毛の長い人形のような美形で、ボクも会うと嬉しい。その目で見れば、加胡さんにも若いころのきれいだつた面影が今も少し残っている。加胡さんは歳のわりにはと驚くのだが、よくスマホやタブレット端末を使いこなせる人で、よくそのお孫さんや知人とビデオチャットをしているようだ。

そして加胡さんのいちばんすごいなと思うところは、高齢でこうして施設で暮らしているにもかかわらず、今の日本や世界の政治や社会の動きについてやたらと詳しいところだ。散歩についていく時などにはそのトピックスがよく出てきて、それに加胡さん自身のコメントも入る。ほとんど政治音痴、社会音痴のボクには、社会科の先生の授業を受けているようによい勉強になる。「テンバツよー」はだいたいこうした話の時に出る。

とあって、加胡さんは他の多くの入所者のように個室でテレビを長時間見ているようすはないし、ラジオも朝のラジオ体操の時以外はつけないようだ。サロンや読書室で新聞や雑誌を手にとっているのもついぞ見たことがない。加胡さんが何から日々の新しい情報を仕入れているかといえば、タブレット端末で見るネット動画なのだ。一日のうちのかなりの時間、加胡さんは個室のベッドかソファで、それを見るというよりもそばに置いて聴いているのだ。どうして部屋のテレビやラジオをつけないのか、と訊いてみたことがあるが、加胡さんの答えは明快で、「あれらはウンばっかりついてるからねえ。聴くと腹が立つてくるのよ」、だった。「新聞や雑誌も同じ。目も疲れるしね。だから私、ネット動画で本当のことを言う人を探して聴いてるのよ」。

加胡さんがそんなふうな習慣になったのには契機があったのだという。加胡さんの一家は、十一年前に福島で被災した。そして皆で東京に逃げてきたのだ。その時まだ加胡さんは元気で暇もあったので、自分の家族や親族や知人友人たちの生活を一変させた原子力発電所の事故について熱心に調べるようになった。そればかりか、関係の裁判の原告の一人にもなって活動した。そしてその経験を通じて、人生で初めて世の中の本当の仕組みが見えた、世界の見方が一変したのだという。

何回かに分けて聞いたことをまとめてみると、それはだいたいこんな話だ。世界で有数の

地震国である日本には、地震にまったく弱い原発は一基も建てるべきではなかった。それなのにアメリカの圧力によって建てることになったが、原発が危険なことは当初からわかっていたので首都はもちろん人口の多い都会には建せず、都会からは遠い田舎に、「原発は安全」と大ウソをつき、田舎の人たちのほつたを札束ではたいて建てた。全国の田舎の海辺に五十基以上も。そして巨大な原発利権が生まれ、それを貪る原子力ムラというものができ、大企業、保守の政治家、官僚、マスコミ、御用学者らがそこにハエかゴキブリのようにたかった。原発がたびたび重大事故を起こし、地震の時の危険が指摘されても、原子力ムラは舌先三寸でごまかした。福島原発大災害は起こるべくして起こったのだ。最も許せないのは、悲惨な巨大事故を起こしておきながら、推進し利権を貪ってきた者たちは言い逃れをするか沈黙をきめこむかして、いまだに誰一人責任をとろうとしないことだ。また国民を、あれはすべて想定外の津波のせい、それに放射能の害は大したものではなかったと騙し、忘れさせ、なかつたことにしようとしている。「あの者らを人間が裁けないのだったら、天の神様にテンバツを加えてもらわないとねえ。テンバツよ！」と、加胡さんはやっぱり上品に、ちよつと過激に小さく叫ぶのだ。

聞いてもボクにはよくわからない。民主主義国で世界をリードしている大国アメリカがそんなに悪いようには思えないし、あの未曾有の重大事故の時にも関係者はよくがんばっていた印象がある。福島でも除染が進んで、各地へ避難した人たちの帰還がだいぶ進んだとマスコミは言っている。悪いけど、加胡さんのは野党的な批判か、たまにネット上で文字を見る「陰謀論」の類かとボクは思ってしまうのだ。

ところで三一五号室には脳出血を起こして右半身にマヒがある藤山というおじいさんが入っていて、やっぱりボクが担当する一人だ。移動は電動車椅子で、食事や入浴には多少の介助を必要とする。言葉も少し不自由だ。もともとどこかの国立大学の先生で名誉教授らしいが、プライドが高く上から目線でものを言い、時々怒鳴り散らす癖があるのでスタッフの間ではすこぶる評判が悪い。そのうえ施設の運営や設備について文句が多く、それを書きつづつたチラシをパソコンで作って許可なくばらまいたり、入所者に署名活動をけしかけたりするので施設では要注意人物とされている。ぼくも藤山さんの世話をする時には自分の言動に極力気をつけているつもりだが、無理を言われたりゆえなく怒鳴られたりするとつい言い返してしまう。するとそれがすぐ上司に報告されてしまうので、どうにも扱いにくい。藤山じいさんは、陰では「不名誉教授」とあだ名されている。

そんなふうなので藤山さんは施設内でも話し相手は少ないが、でもどうしたとか、加胡さんとはすこく仲がいいのだ。二人が横に並んで食事をしたり、サロンや庭のベンチで談笑したりしているところをよく見かける。その時の藤山さんはいつになくおだやかそうで上機嫌だ。そして加胡さんのことを、「あの人はなかなか勉強家でものがよく見えている人だ。大学で学生に教えてほしいくらいだ」と言うくらい、一目置いているようだ。

さてそこで、先週所内で突然起こった、「要望書」問題である。

まずワクチン接種に関して一悶着が起こった。施設としてはいまだ世の中で新型コロナウイルスの蔓延が収束しないことから、入所者への三回目のワクチン接種を進めようとした。それは保健所からも自治体からも言われていることだ。しかしそれに藤山不名誉教授が嘔みついた。そして不満がたまっていたのだろう、ワクチン接種のみならず、コロナ騒ぎが二年前に起こってこの方の施設の対応について激しく批判した。そもそも多数の身体の弱った老人を預かっている施設なのに、今回の病気に対する基本の認識からなっていないというのだ。そして自ら要望書をつづり、所内で賛同署名を集め、それを所長に提出して「団交」を要求してきた。

「団交」はともかく、高いお金を出して入所している方たちは施設側にとって大事な顧客でもあるから、話し合いをして円満解決したいと施設側は考えた。双方でやり取りがあつて、話し合いは五日後の夕食後に会議室で行われることになった。メンバーは入所者側からは藤山さん、もと労組の幹部だったという森田さん、古手の入所者の木俣さん、そして加胡さん、施設側は所長、事務長、嘱託医の中島医師、そして介護士を代表してということで、なぜかボクも出るようになったのである。

しかたがないので、ボクは休憩の時、事務長から手渡された「要望書」のコピーに目を通してみた。法人の理事長および所長宛になっていて、表紙の右肩に、「〇〇ホームでの生活を改善する入所者有志の会」とある。A4サイズで六枚もあり、ほかに英文を含む十枚以上の資料も添付されているのでボクはうんざりしたが、要望書だけでもがまんして目で追ってみた。堅苦しく長々しい前文の後、太字の見出しのついた十二項目にわたる要望が箇条書きにされている。マスクはつけるだけでも有害、またコミュニケーションを阻害するので強制するな、PCR検査はまやかしなのでやめよ、ワクチンは毒物なので接種を勧奨するな、面会の制限は人権侵害にあたるのでただちに取り止めよ、サロンや食堂で人と距離をとらせるのはやめよ、各所に設置されている隔てのアクリル板も効果はないので不要、カラオケや合唱などのイベントはコロナ以前に復してふつうに行え、などなど。要するに、今度のコロナはふつうの風邪の一種にすぎないから過度に恐れるな、適度に感染を防ぐ措置のみやうって種々の規制は撤廃すべし、という主張だとわかった。

話し合いの前に、一度施設側の所長以下五、六人で打ち合わせをした。当然、世間の情勢を見渡しても、「有志の会」の「要望」は特殊であつて認められない、となつた。説明、反論の資料を、事務長が厚労省や自治体からの通達やホームページからピックアップしてまとめることになった。ただ、いちおう交渉ごとだから、向こうの顔も少しは立て、全部をはねつけるのでなく所内でのマスク着用は場所によっては少しゆるめ、イベントの復活は検討したい、と回答することになった。そのあとは、不名誉教授にはほんとうに困つたものだ、他の入所者への悪影響も大きい、なんとか退所させられないか、という話が続ぎ、その件に

ついてはいずれ所長と事務長が顧問弁護士に相談に行くことになった。

翌日、庭で加胡さんに会った時、ボクは要望書のことをちよつと訊いてみた。ベンチに坐った加胡さんは微笑んで、

「ああ、あれね。あれは藤山さんの研究なのよ。このごろ毎日パソコンに向かって熱心に勉強されているわ。むずかしい論文も辞書を引きながら読んでるんだって。私、感心してるの。でもあれには私の意見もだいぶ入れてもらったのよ」と涼しい顔だった。

「あのね、私はこう思うのよ。人間で、すごく欲深い動物でしょ。だからお金と権力を持ちたがるの。そしてうまくいっていったん持ったら、ゼツタイ手放そうとしない。もつと持ちたがる。それで他人や世の中を支配しようとする。お金を使って組織を使って人を騙そうとするの。そんな人たちにたぶらかされて、右往左往して、命を失ったり不幸になったりするの。いつも庶民の側にきまってる。私が経験した原発大災害の時がまさにそうだったわ。戦争もそう。今度のコロナ騒ぎも同じよ。お金の流れを見るのが大事、このコロナ騒ぎでいったい誰が儲けているのか、それだけ見て追っていったら、騒ぎの正体が見えるのよ。私ね、孫娘にはワクチンゼツタイに打たせないの。今ね、国じゅうで幼い子供たちのワクチン接種が進められようとしてるでしょ。あれ、ゼツタイ、ダメ。いたいけない子供の腕に注射針がささる場面を想像したら、もう私、悲しい、悔しい、いてもたってもいられない。ワクチンといつても今度のはほんとのワクチンじゃない、治験の終わっていない、副作用のいっぱい出ている危険な毒物よ。子供たちの身に何か起こったら、もう取り返しがつかない。誰が責任取るの？ また誰も取らないわ。テンバツよ！」

「有志の会」と施設側の話し合いは予定通り会議室で行われたが、ボクは両脇に汗を垂らしながら緊張して坐っていたのに、あまりに盛り上がらなかったのが拍子抜けしてしまった。ふしぎなことに肝心の藤山さんにまるで勢いがなかったのだ。もともと口が不自由な上にたまたま体調が悪かったのか、要望書の文章の闊達さとは裏腹にしどろもどろで、たびたび言葉に詰まった。あれは事前に裏で誰かにこれ以上騒いだら強制退所させると脅されていたのか、と後でボクは勘ぐったくらいだが、まーさか。

「有志の会」の他の人たちも、加胡さんが数回短く発言したくらいで、森田さんも木俣さんも置かれた人形のように無表情でほとんど黙っていた。対する所長や事務長は、表面上は低姿勢で藤山さんや加胡さんの意見に一々耳を傾けるふうをよそおった。「コロナパンデミックは軍産複合体の陰謀……」とか「大手製薬会社のぼろもうけ……」とかあまり脈絡もなくもごもご言うばかりの藤山さんの顔を見据えて、中島医師が、今次の新型コロナウイルスの危険性やワクチン接種の必要性についてとうとうと一席ぶった。事務長が用意して各人に手渡された分厚い資料はほとんどめくる必要がなかった。

「話し合い」の後、藤山さんは案外な不首尾に終わって意気阻喪してしまったのか、それともやはり容態が悪いのか、何も発言、発信しなくなった。パソコンにも向かわず、自室で

ぼおっとしている時間が長いようだ。藤山さんを強制退所させる話がどこまで進んでいるのか、ボクは知らない。施設側が「有志の会」との「話し合い」の結果として二、三の小さな改善点を大文字で記したポスターをロビーの掲示板に一枚貼りつけた。

でも加胡さんはその後もふだんと変わらない。庭やサロンで多くの人と笑顔で挨拶をかわし、談笑している。たまに世の中の欲深い人たちを論って、「テンバツよ！」とやっている。

「人間は欲深い動物」、それはそうだな、とボクも思う。ボクもそうだから。でもその個人個人の欲望が集積して肥大化して、もう今の人間の世の中はほんとうにテンバツが必要なくらい歪んでしまったのだろうか。テンバツ、テンサイ、テンゴク、テンシ……。そうだ、加胡さんの天使のような孫娘に、また会いたいものだ。

## 座敷わらし？と少女

家を仕舞うという用事は元気が出ないものだ。

五月半ばの平日、曇り空の下、もう七十歳の吉山は車を運転して一人で故郷の実家に向かった。実家は無人である。十年近く前に父母が相次いで亡くなった。以来、吉山は管理もかねてよくいえば別荘代わりに実家を利用してきたが、年に三、四度帰省するだけでそれもたいていは四、五日一人ですごすだけだった。妻からも将来子供たちに迷惑する面倒なお荷物だと口うるさく処分を言われるし、今月やっと地元の不動産屋に売却を依頼してその用で帰るのである。

実家は四国東部の農村にあつて海も近い。たまに帰ると田園風景を愛で、釣りや海水浴を樂しむなどしてきた歳月だったが、築六十年近い古家では押し入れにしまったままの多くの蒲団類も古びてしまい、子や孫たちや友人がやって来ても泊まらせにくくなった。去年の夏、都会に住む娘家族が実家の近くまで海水浴に来た時も、彼らは古家を敬遠して隣のホテルに泊まった。もう近所に親しい縁戚や友人がいるわけでもなし、吉山ももう潮時だろうと思う。

吉山は三時間近く車を駆ってその市に着くと、まず実家からは少し離れた場所にある父母の墓に寄って参り、なんとなく古家を処分することなど報告した。昔父母が建てた家である。それから行き慣れたスーパーでとりあえず二、三日分の食料品や酒を調達してから帰った。今度帰宅するのはおよそ半年ぶりにもなるが、着くと古家は変わったようすもなく立つ

ていて、鍵で玄関のガラス戸を開けると内部も前に去った時のままだった。吉山はいつもの習慣で、まず一階と二階の雨戸を開け、窓を開放して風と光を入れ、掃除機を唸らせて床のほこりを払った。終わると玄関前の雑草を抜き、箒で掃いた。ボイラー式の温水器を点けてシャワーを浴び終わるころにはもう日暮れ近かった。夕食は、テレビはもう置いていないのでラジオを聴きながら、スーパーで買った弁当や惣菜を食べ、妻の目のないのをよいことにいささか酒をすごした。

翌朝、いささか二日酔い気味だったがそれでも早起きして庭や家回りの草や木の枝を刈った。初夏なのでまだ雑草はそれほどはびこらず、真夏には塀からあふれだすササもまだ伸びていなかった。

午後二時過ぎに、約束どおりに地元の不動産屋の田川が家財処理業者を連れてやってきた。身体つきのがつしりした家財処理業者は、ほんの数分間一階二階と見て回っただけで、二十立方だから二トントラック五台分、だからいくらくらすね、と見積もった。思惑よりはかなり高かったので吉山はためらったが、業者は近年家財処理の費用は高騰の一方でこれは適切な値段だ、何なら他の業者に訊いてもいい、と強気だった。吉山は相見積もりを考えたがそれも面倒な気がして、交渉して五万円ほど値引きさせただけで手をつことにした。

業者が帰った後、田川と互いに用意した書類を見せ合いながら一時間ばかり売却に向けてもろもろ相談した。田川によれば、近ごろこの辺りでは高齢化が進んで田んぼを売りたい農家が多く、宅地は供給過多で、そのうえ南海トラフ地震のハザードマップで最大高三メートルの津波が押し寄せると予測されているこの辺りの地価は十年前の半値近くまで下がってしまっているとのこと、売り出し価格はかなり抑えなければならないようだ。抑えて売り出したとしてもなかなか客がつかないかもしれない、ただ、近所に駐車場にする土地を探している人がいて、興味を持つかもしれない、その人にもあたってみますよ、と田川は話した。その人が買ったらこの家はすぐ壊すのですね、と言うと田川はうなずいた。今坐っている家がやがて油圧ショベルで解体、撤去されるようすを吉山は思い浮かべた。

吉山は、四十年代半ばぐらいの田川とは以前にも他の件で数回会ったことがある。旧知なので雑談も出て、彼の息子がもう高校生になったと聞き、吉山も問われて三年前に退職したことなどを話した。田川の対応は丁寧で、話しぶりに地元同士の気安さにもじんで、吉山はこの分なら買い手さえつけば売却までスムーズにいきそうだと思った。田川に家の玄関の鍵の予備を渡した。

田川が帰った後、吉山はし残していた車庫の掃除をしようと箒を持って玄関のガラス戸を開けて出て、ああ、塵取りもいるなと気づいてガラス戸から戻ろうとした、その時だった。廊下の右手に続く居間のガラス戸の陰に、すっと小さなものが隠れた、ように思った。毛のない頭の、緑がかった黄土色の顔と身体の、目の吊り上がった子供のようなのが。ぞっとし

た。一呼吸、二呼吸おいて上り框から上がって居間を覗いた。誰もいない。が、誰かいたよ  
うな。さらに身の毛がよだつた。そんな身体感覚は実に久しぶりだった。

座敷わらし？ 座敷わらしは、築何百年の旧家に住むのではなかったか？ この家は古  
いといつてもたかだか築六十年だ。錯覚か？ 光のぐあいでは何か映った影だったのか、と  
思っても、目の中の残像は消せなかった。合理的説明はできかねた。いる、というより、い  
ないと言い切るのがむずかしい、といった心理である。

車庫の床を掃きながら、吉山は、この家で父母の暮した数十年を思った。公務員だった父  
が、それまでは借家で暮していたのを、二人の子供が大きくなってきたので借金をして、環  
境がいい、自分たちの通勤にも便利だという理由でゆかりもなかった農村に宅地を買い求  
め、新築した家だった。敷地も家もこじんまりしているが、三十代で家を建てたと嬉しそ  
うだったまだ若々しい父のようすを吉山は今もおぼえている。当時中学生だった吉山自身は  
学齢期の四年ほどをそこで暮らしただけで大学入学で都市に出、吉山の弟もその三年後に  
同じように遠方の都市に出た。その後はずっと父母二人で暮らしたが、家はそのうち息子た  
ちの家族がたまに帰って来る用にとやや大がかりな増築をした。ある時期、正月や盆に息子  
たち家族が帰省して集ったのがこの家のいちばんにぎわった時だったろう。そのころの集  
合写真がこの間まで和室の鴨居に額に入れて掛けてあった。そのうち父も母も順番に定年  
退職を迎え、それからは互いに老と病をいといいたわりながら長い年数を過ごしたのだっ  
た。

旧家でもないふつうの小家にも魂が宿るものか。とうとうその家を売り払おうというの  
で、壊そうというので、それが一言もの申そうとしてちよつと姿を顕わしてみたのか。ある  
いはそれは自分の無意識の中から現れ出た影だったのかもしれない。反芻すれば、その緑が  
かった顔のふんいきはなんだか父親に似ていた。いや母親にも似ていた。いや、思い浮かべ  
る誰の顔にも似ていた。しかし、誰の顔にも似ている顔なんていうものがこの世にあるのだ  
ろうか。ぞつとはしたがとくに気味悪がるでもなく、吉山はそんなふう思った。

翌日の午後、再度田川がやって来て家財処理や家の売却についての情報をいくつか伝え  
た後、法務局に行つて入手してきたと図面を示して、この際は北隣の家との境界をはっきり  
させておく必要があるという。吉山の頭にはないことだったが、そういうことならと二人で  
外に出てブロック塀の境界を確認すると、塀は実家の周囲をぐるりとめぐっている。塀  
の部分までは実家の所有になると思われた。しかし法務局に残っている昔の資料ではそこ  
は判然としない、昔はそんな雑なやり方だったので、今になって境界問題が起こることは珍  
しくない和田川は言う。家の中に戻って相談し、結局吉山が隣家に直接確認をとることにし  
た。田川は、もし隣家がブロック塀の中間が境界線だと主張するなら、それを黙って受け入  
れる方がいいとアドバイスした。それで登記簿上の敷地面積の値が変わるものではないし、  
隣家と境界問題が起こってこじれてしまったら売買は難しいし、解決のために実測すると

なればかなりの日にちと費用を要するという。そういうものかと吉山は了解してその腹積もりですぐに隣家を訪ねてみたが留守のようだった。

薄暗くなつたころ、吉山がまた隣家を訪ねてみると今度は中から灯りがこぼれていた。出てきた一人暮らしのおばあさんに挨拶して自宅を売る件を伝え、ついては、と境界の話を持ち出すと、「さあ、何もわからんけん」と初めは言っていたが外に出て境界になっているブロック塀をさわりながら、「ええ、ここまで吉山さんの家のものと思う」と言ってくれた。家財処理なども話題になったところで、吉山は思いついて「全部処分されてしまうのでもったいないんです。使えそうなものがあつたらぜひ持って行ってください」と勧めて、家の中も案内した。結局おばあさんは冷蔵庫と自転車をもたらしてくれた。自転車は吉山がすぐ隣家の庭に運び、冷蔵庫は家財処理の折に業者に運んでもらうことにした。

日が暮れると家の前の田んぼでカエルの合唱が高まった。昔も今ごろの季節はこうだったと吉山は思い出したが、もとは広々としていた家の前の田んぼは、道沿いにだんだんと宅地に切り取られ、もうもとの半分以下の面積になっている。また弁当を食べ、酒をすごしつつ、吉山は妻に電話をして進捗状況を報告した。吉山が留守なので老犬が淋しがってよく吠え、ちよつとようすが変だ、今朝の散歩の時は人に噛みつきそうになって冷や冷やしたと妻は知らせた。

翌日の午前中は、残しておくこまごまとしたものを選んだ。家を売るまでは契約やら引き渡しやらでまだ二、三度は帰郷する必要があるので、寝具や食器などを最小限確保しておくほうがよいわけだ。掃除機もいる、石鹸も、と思いつくままに、意外に手間取った。座敷わらし？はもう姿を見せなかった。

吉山は午後、田川に家を出る旨のメールを入れ、戸締りをして家を去った。スーパーへ寄って多少の土産のフルーツと櫛を買ひ、もう一度墓所に寄った。

大きな川にかかる橋を渡って、田園地帯を貫く国道のバイパスを北上した。道は空いていた。歩道にもう徒歩や自転車で行く小中学生を見かけた。ある所で信号機が黄色に変わったので停止すると、向こう側の信号機の下は歩道にランドセルを背負った少女が二人立っている。でも向かいの信号機のほうを見るでもなく、身体をねじるようにして笑顔でなにかふざけ合っているようだ。通い慣れた道の押しボタン式の信号で、少女たちは信号が変わるのにどれくらい間があるのかよく知っているのだろう。やがて二人は向かいの青信号をたしかめると、吉山の車のすぐ前を笑いながら過ぎていった。小学生とはいえもう身体も大きく、五、六年生なのだろう。二人を見送りながら、突然、その笑顔と身体のはずむようなようすに思いがけず吉山は撃たれてしまった。明るく外界が急に暗転したようで、心臓が動悸を打つほどだった。

その刹那のあいだに、吉山の頭にはこんなことがかけ廻ったのだ。あの少女たちは二〇一〇年頃の生まれか、すると少女たちは西暦二一〇〇年頃まで生きることになるんだ。対して

自分は、あと長くても十年、二十年、二一〇〇年には確実に跡かたもなく土や塵あくたに混じっている存在でしかない。今、生の輝きの中にのみ生きているような彼女たちには、死という文字は無縁だろう。ああ、でも、欲深いことだが、今この瞬間、自分があの少女たちに成り代わられるのだったら。自分も二一〇〇年頃まで生きられるのだったら。思うそばから、もちろんその絶対的不可能はわかった。それは地球が反対側にまわり始めてもしなければありえない種類のことなのだ。それでも、その不可能性に歯ざしりする。胸が痛い。

生を終えることへの恐怖は、動物的レベルに根ざしながら人間の意識が肥大させてしまうのだ。自然なことなのに、それは人としてとてつもなくつらく、その厳とした事実に対してはいきどおろしくさえある。なにもこの世に自分は望んで生まれてきたのでない、なにか大きなものによって突如投げ出されたようなものだ。それなのに終りもまた我から望まず、大きなものによって突如かつさらわれてしまうのだ。横断歩道を渡ってそのまま進み、両側に草の立つ田んぼの中の小道に入っていく少女たちの後ろ姿を見送りながら、吉山はなおそんな思いを反芻した。

向かいの信号が青に変わったのを確認して吉山は、ペダルを踏んだ。車が動き出し、ふと目が惹かれて横の方を見ると、小道の上にあるはずの少女たちの姿が、なかった。

## 漁港にて

〔サギ〕

老人は夕方近く、簡単な釣り道具をリュックと包みにまとめ、自転車を東浜の方に走らせた。夏は海水浴場になる二キロほど続く砂浜の北端に小さな漁港がある。その手前の集落に着いて昔からある小さな釣りエサ店でエサと氷塊を一つずつ買った。店のばあさんの話では、堤防でぼつぼつ釣れているようだという。自転車は便利で、漁師集落の中の狭い路地を難なく走り、港ではショートカットで通り抜け、堤防の壁に沿って先端近くまでそのまま行った。

まだ明るい時刻で、堤防に釣り人は二、三人しか見えない。西日のきつさを思ってきたが、ちようど傘のような大きな雲が西の空を覆ってくれている。二つの堤防の間の船の出入り口に沖から帰って来る漁船があり、反対にそこから出ていく漁船もあった。港の奥の方の船が並んでいるあたりから、の太い話し声が海面をすべってくる。風があり、隣の浜に寄せては引く波の音がザアザアと少し高いが、堤防の内側はさざ波が立っている程度だ。

老人は場所を決めると、バケツを投げて海水を汲み、その半分を別のバケツに移し、それに凍っているアミエビのブロックを漬けた。それから折り畳み椅子に腰を下ろし、竿の準備にかかった。リールを取り付け、テグスを竿のガイドの穴に通し、その先を金具でサビキの仕掛けにつなげた。いちばん下に錘籠を付けた。慣れた動作だがゆっくりしている。バケツの中をさわってみると、エサのブロックはまだ固かったが、スプーンでこそぎ取って錘籠に詰めた。それを、竿を上振って海面にそっと投げ入れた。錘籠はすぐに沈み、エビがあたりを散っていった。竿を構えて落ち着くと、ふーっと深い息が出た。

老人は昨日まで三日間、県庁のある街の病院に入院している妻に付き添い、今朝娘と交代して自宅に帰ってきたのだった。ほっとすると同時に後ろ髪を引かれる思いで病院を出、四十分ほど車を走らせている間じゅう心は重かった。ベッドに寝ているか車椅子かの入院生活で、筋力が落ち、動きが減っている。手術を受けた頭もはつきりしないようで、言葉がだんだん出にくくなっている。それでも老人が顔を見せると、か弱いが嬉しそうな顔を作った。目を見つめながら小声で、家で一人でちゃんと食べているのかと訊いた。いつも訊くことは同じだ。老人はちゃんと食べとる、不自由ないと答えてから、食事の介助や車椅子での移動などできることはつき合った。夜は病室のソファで毛布を掛けて寝た。大したことはしなかったのに身体は疲れていて、家に戻るとスパーで買った弁当を食べた後、居間で横になって昼寝をした。目覚めると九月の日はまだ明るく強かった。これといった用もなく、晴れない気分の中で何をしようかと考えたが、ふとああ久しぶりに海を見に行こうと思いついた。

エサ籠を投げ入れるたびにアタリはあったが、アジはかからなかった。タイの幼魚や名も知らない何かの幼魚ばかりがかかって、釣ったそばから逃がしてやるしかなかった。矛盾しているのだが、老人には魚を狙いながら殺生を免れたい思いもあった。釣りは子供のころかの趣味だが、近年そうした気持ちが強まった。大きくなれば、と声をかけて幼魚を海に放った。氷塊を入れたボックスにはアジしか入れないつもりでいた。

二十分ほどそうしているうちに、ふと大きな鳥が一羽、老人の近くに舞い降りてきた。五メートルほど距離を置いて長くくちばしの顔を横向きにして静止し、こちらをうかがっている。背の高さ一メートルくらい、白い細身の身体に灰色の羽の、これはふだん田んぼや川筋にいるサギにちがいない。港で出会ったので老人は珍しくもおもしろくも思っ、鳥が驚いて逃げないよう、自分の動作をゆっくりにした。横目でちらちらその姿をうかがうと、ようやく以前飼っていた犬と少し似ている。背の高さが似ている。何となく目つきが似ている。しかしもちろんサギは二本足で細長く、くちばしは長く黄色い。サギは初めの距離を保ったまま、なぜか飛び立っていかなかった。

また何かの幼魚がかかった。海面に放った。次にかかった時、老人はふと思いついてそれを、「食べるか？」と小さく声をかけてサギの方に投げてやった。逃げてしまおうかと恐れた

が、サギはその小魚にとつとつと跳ねて近づき、くわえ、すぐ呑みこんでしまった。ああ、と老人は了解した。こいつは以前にもこうして釣り人のそばにやって来て餌をねだつてきたのだろう。何度もやっているのだろう。釣り人からもらう方が自分で漁るよりは手っ取り早く楽だということか。さかしい奴だ。老人は鳥が気に入った。次に釣り上げた小魚をやる時、前より少し自分に近く投げてみた。とつとつと、その分サギはやはり近づいてきて、食べても後ずさらなかった。あいかわらず横目で、というより目は横についているのだが、老人をうかがっている。こつちも横目で見ている。横目と横目のやり取りだと、老人はちよつと愉快だった。三匹目もやった。また少し近づいた。次は小さなクサフグがかかった。これはやらないほうがよからうと水に逃がした。

サギの食べつぷりがよいので、老人はまたやろうと釣れるのを待ったが、そこでアタリがびたりと止まってしまった。何度も錘籠のエサを入れ替えるが何も釣れない。老人はサギが逃げてしまうのでないかと少し焦った。でもがまん強いのかサギは逃げるそぶりもなく、彫刻のように静止したままだ。数分してやつと引きがあった。今度は少し強い。大きめの白っぽい何かの幼魚が上がってきた。針から外して、老人はちよつとためらった。こいつはサギが呑みこむには大きすぎるかもしれない。でもそれは奴の判断だと思ってやはり投げてやった。サギは少しもためらわずにくわえた。そして長くちばしを空に向けて重力にまかせるように喉に入れた。細長い首を太いものがゆっくり下りていった。

五匹目をやったとき、サギはそれを拾ってくわえ、もう呑みこまず、少し体を沈めて下を蹴り、大きな羽を広げてばさばさと飛び立った。空で一度弧を描いた後、堤防の向こう側へと消えた。その空白を老人は見つめた。

釣り人の数が少し増えていた。たいていはアジでなくカマスやイカをねらっているようだ。いつとき斜めの光が港や向こうの山を茜色に染めた。でもそれが過ぎてしまうと、闇がくるのが早かった。

#### [トビ]

昼前、薄日を浴びながら家の脇の菜園で雑草を抜いていた時、老人はふと海辺に行ってみなくなった。海を眺め、波音を聴き、潮風に吹かれない。それで昼食を簡単にすましてしばらく休んだ後、納屋にしまつてある釣り道具一式を取り出し、あまりよく確かめもせずに必要なものを適当に取つて小さな荷物にした。釣りはどうでもよかつた。でも堤防で釣り糸を垂らしているほうが落ち着いて海を感じていられる気がした。

自転車で東浜の方に走った。途中、川にかかった橋を渡つた時、刈り取りの終わった田んぼのあぜ道から、「おう、どこ行くんぞ」と声をかけられて、老人は止まった。軽トラックのそばで、スマホを片手に麦わら帽子が笑っている。近所に住む幼なじみだ。「おう、えらい精が出るのう。釣りに行くんじや」。「珍しいう。夕方のおかずに、アジでもクジラでも頼

むわ。「おう、まかせとけ」。「気いつけえよ」。「おう」。

十分もかからずに浜辺近くの集落に着いたが、どうしたことか、何度も来ているのにエサを売る店の場所の記憶があいまいだった。狭い路地をさまよい、人に訊ねてようやく道の曲がり角にあるその店に着いた。入っていくと店のいつものばあさんは、「ああ」と見知ったふうに、「エサですね。ガガネですか」と訊いた。「ええ、まあ」。「ではこれくらい？」と冷凍庫からアミエビの小さなケースを一つ取り上げて見せた。「釣れとるようですか？」。「ええ、ぼつぼつ釣れとるようですよ」。そうだ、このばあさんはいつも「ぼつぼつ釣れとる」と言うのだったと老人は思い出した。「飲み物はあるんかな？」。老人は水の用意を忘れてきたのだ。「売ってないんですよ。あそこに」と、ばあさんは港への出入口近くに立っている自動販売機を指さして教えてくれた。

港内に入って進むと、行く手に先客が一人だけいて、自転車にまたがった派手なシャツの年寄りと話していた。釣り人はちようどサビキでアジを釣り上げていたが、白い腹を光らせたアジはずいぶんと小ぶりだった。向かいの堤防に彫刻みたいに灰色のサギが一羽止まっていた。ああ、と老人は去年のサギを思い出した。

突端近くで自転車から下り、準備にかかった。去年の秋に同じ場所で竿を垂らした記憶がよみがえってきたが、あれからも何年も経ったような気がした。

エサ店のばあさんにガガネかと訊かれたので、では今どきはガガネを狙うものかとビンール袋を探ったが、いくつか投げ込んできた中に五目の仕掛けはなかった。さっきの店に戻れば買えるだろうが、そんな意欲は老人にはない。釣り糸は垂らすのが、釣れても釣れなくてもよかった。しかたなく袋にあったハゼ釣りの二本針の仕掛けを結び付け、今どきは珍しいのかも知れない、昔ながらの大きめの赤い玉ウキを穴に楊枝をさしこんで付けた。塗料の剥げた木製のウキは、やっぱり釣りが趣味だった父親の持ち物だったのかもしれない。エサを付け、竿を振って投げてみたが、ウキが軽いためか思いのほか飛ばず、五メートルばかり先の海面に落ちた。

アタリはすぐには来ず、赤いウキはゆっくり横に流されていく。風はほとんどなく海面が風いできれいに澄み、手前の方なら底の石の並びぐあいまで見すかせた。深さはせいぜい三、四メートルか。何かの灰赤色の幼魚の群れが集団のダンスのようにゆっくり広がっている。赤クラゲの子供が泳いでいる。二十メートルほど離れている先の釣り客はまたコアジを釣り上げている。子供らが小さかったころ、夏の夕方、何度かここに連れてきてアジを釣らせたことを思い出した。入れ食いの時もあり、一度に三匹、四匹とかかって子供らは何度も歓声を上げた。あれからいったいもう何年になるのか。

赤いウキはなお静かだった。一度引き上げてみたが、針につけたエサはもとのままだった。そのまま竿を振って投げた。やはり近くに落ちた。釣れても釣れなくてもよかった。むしろもう殺生はあまりしなくなかった。もう今日が最後の釣りになるかもしれないな、とな

んとなく老人は思った。あらためて周囲を眺めた。突端のテトラポットの先を廻って、二隻の漁船が続いてスローで入ってきた。小さな波が立った。向かいの堤防の上に釣り人が二人来ていた。その堤防の向こうに見える港のそばの砂浜に寄せている波も、今日はおだやかだ。老人が妻を見送ってから三カ月が経っていた。遺言通り、身内ばかりの小さな葬式をした。いずれも遠くの都市で暮らしている息子と娘は、これからの父親の一人暮らしを案じた。老人は、あいつの入院中でも一人でやれた、何も心配ないと答えた。妻の遺品は娘が二度ほどやって来て整理していつてくれたが、老人は家の中のどこかに今も妻はいて今までのように何か家事をしているのに、かくれんぼでもしているつもりか、自分には姿を見せないような気がしてならなかった。ふと妻が台所にいる気配を感じて見に行ったり、夜中に菜園にいるような気がして懐中電灯を手に呼び戻しに出たりした。「おとうさん」と呼ぶ小声が耳もとでして振り向いてしまうのは毎日のことだ。

何度かエサを取り換えてみてもまるでアタリはなかった。こんなに何も無いのも珍しいと思っていたら、ウキがちよつと沈んですぐにもどり、まわりに小さな波紋が広がった。それを二度、三度とくり返した後、ぐいと水の中に引き込まれた。老人はリールを押しさえながら竿を持ち上げた。竿はだいぶしなった。大きいか、と思つてリールを巻き取り引き上げると、小ベラが二匹かかっていたのだ。堤防に上げてぬめるベラをつかんで針を外し、二匹とも海面に放った。一匹はすぐに潜つていった。針を外すのに少し手間取ったもう一匹は弱つてしまい、ヒレは動かしながらしばらく浮いていたが、なんとか身をくねつて潜つていったので老人は安堵した。

また竿を垂れていると、先客の釣り人が寄ってきて、「何を狙つてるんですか？」と訊いた。「ガガネでも、と思つて」。「ああ、ガガネはうまいですよ」。

コアジの釣れぐあいを訊くと、「まあ、ぼつぼつ。まだ小さいけど南蛮漬けにしたらいい酒のあてになるんです」

還暦くらいに見える男はこの常連なのだろうと思つていたら、そうではなく、ここは五年ぶりに来たというので老人はちよつと驚いた。「南の方から始めて、だんだん北に移っていくんです。そのうちにアジも大きくなつてきます。今日はその初日なんです」。

よくここに来るのかと逆に訊かれたので、いや、年に一、二回、と老人は答えた。

またしばらく釣れず、老人はもう帰ろうかと思つた。もしガガネが釣れても逃がしてやるつもりになっている。こんな意欲のなさではやっぱり今日で釣りは終わりだな、などと考えていた時、ウキが揺れて沈み、すつと海中に引き込まれた。引きはだいぶ強かったが、上げてみるとやっぱりベラで、ただ先の小ベラの三倍くらい大きい成魚だった。しかし釣り針を喉深く呑み込んでしまっている。老人はベラを片手でつかみ、糸を引つ張つてみたがぜんぜん外れそうもなかった。外す道具も持ち合わせていない。老人はあきらめてベラの口に顔を寄せ、歯で糸を噛みきり、海面に投げてやった。昔話のタイのように、針を呑んだままでも

なんとか生きられないかと思った。でもペラは海面に腹を見せて浮いたままで、ヒレも身体もぴくともしない。握りすぎてしまったのでダメだったか、と老人は思い、それでもなんとか泳ぎ出さなれないものかとお見つめていたその時だった。横手から空気を切る音が聞こえ、目の前に影が走ると思ったら、薄茶色の羽を広げた大きなトビがばさつとその仰向いたペラの上にかぶさり、たちまちかつさらっていった。飛沫もたてない、みごとなさらいようで、トビはペラをつかんだまま軽々と舞い上がり、松が斜めに生えている向こうの丘のほうへと飛んでいった。

意外な成り行きに啞然としながら、老人は今度はちよつとトビの心配をした。ついさっきまでそのおだやかな海底でゆっくり泳いでいたペラの数奇な運命も思った。ことが起こったあたりはすぐに波紋を消して何ごともなかったように平らに返った。一人取り残されてしまったように、老人は感じた。

まだ日は明るく、釣りによい時間帯はこれからだったが、老人はもう帰り支度を始めた。